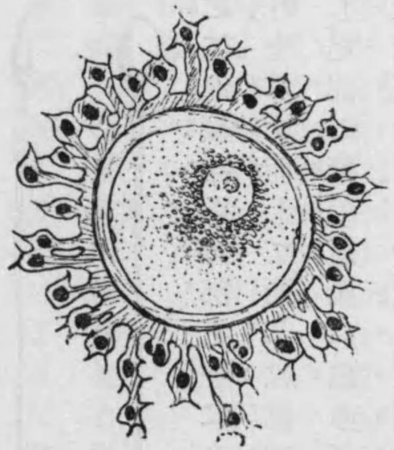
瓜期と稱す、其著明なる變化は全く女性的の體軀となり乳房及び生殖器の發育と共に性慾を覺え、月經來潮し卵子發育して排卵を始むるにあり。

(一)卵細胞

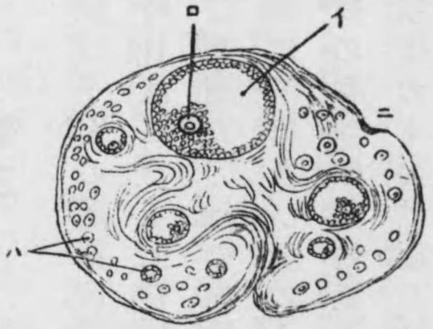
卵細胞即ち卵子は卵巣に於て形成せらるゝ球形の細胞にして直徑約〇・二粍を有し卵黄と稱する原形質と、胚小胞と稱する核とより成り、透明の膜を以て被包せらる。

第二十四圖
人卵の圖



卵子は卵巣内に於けるグラーフ氏胞中に包有せらるゝものにして、性的成熟の始めに於て既に

第二十五圖
卵巣横斷想像圖



イ グラーフ氏胞　ロ 卵子
ハ 原始濾胞　ニ 黄體

三―四萬個を有す、グラーフ氏胞は球狀の胞囊より成り、成熟せるものは約一〇乃至一五粍の直徑を有して卵巣の基質中に包埋し、其の胞囊の内壁は多層の上皮を以て被はれ上皮は一局部に於て多數の細胞堆積をなし、其の中に卵子を藏し、胞囊内には蛋白を含有する帶黄色の液體を充滿す。

(二)排卵機能

卵巣のグラーフ氏胞が順次成熟して約四週日毎に一個宛破裂し以て中に包有せる卵子を卵巣より遊離す、之を排卵機能と云ふ。而して其の卵子は喇叭管に達し氈毛運動に由て子宮に送られ、此

黄體の内分泌物は子宮粘膜を保護して卵子を成育せしむ

の間に於て精蟲と相會したるときは受胎卵となりて子宮壁に着床するも、否らざるものは死滅して體外に排除せらる。

グラーフ氏胞が破裂したる後は濾胞上皮及び結締織細胞が增殖して之を充塡す、之を黄體と稱せり。

第三　月經

月經は子宮の週期的出血にして、通常平均四週毎に反復し、其の持續時日は二乃至七日に亘るも平均三―四日間にして其の間平均三〇乃至五〇竏の血液を排出す、月經血の性質は暗赤色にして粘液並に子宮及び膣の上皮を混じ凝固性を有せず。

月經の初潮は氣候・風土・人種等により遲速ありて、熱帶の女子は早く寒帶のものは遲し、日本に於ては平均滿十四年七ヶ月乃至十四年十ヶ月なり、而して平均四十九歳に到れば生理的に閉止す、此の時期を月經閉止期又更年期と稱し、排卵は止み生殖器は衰退し性慾衰へ時として一種の神經症狀を誘起することあり。

月經來潮は卵巣の週期的變化に基くものにして、即ちグラーフ氏胞の發育と共に子宮粘膜に增殖的變化を來し、卵子受精せるときは益發育して、卵子を著牀せしめ脱落膜を形成するも、卵子受精せずして死滅するときは、卵巣黄體萎縮すると共に、子宮粘膜は剝離して出血し月經となりて現はるゝものなり、故に卵巣の變化と子宮の變化とは週期的に相一致す、而して排卵機能と月經との時期的關係は確説なきも、月經の中間期に當ると信ずるもの多し。

第四　射精及び陰莖勃起

精液の排出は之を射精と名け、輸精管・精嚢の諸筋及び球海綿體筋・坐骨海綿體筋の收縮に由りて反射的興奮を起し、精嚢壁及び輸精管を收縮せしめ、精液を尿道内に射入するや忽ち器械的刺戟となり、球海綿體筋を調節的に收縮せしめ以て精液を尿道外に射出す。此時快感あり。而して精神興奮頓に止み次で全身の疲勞を來す。

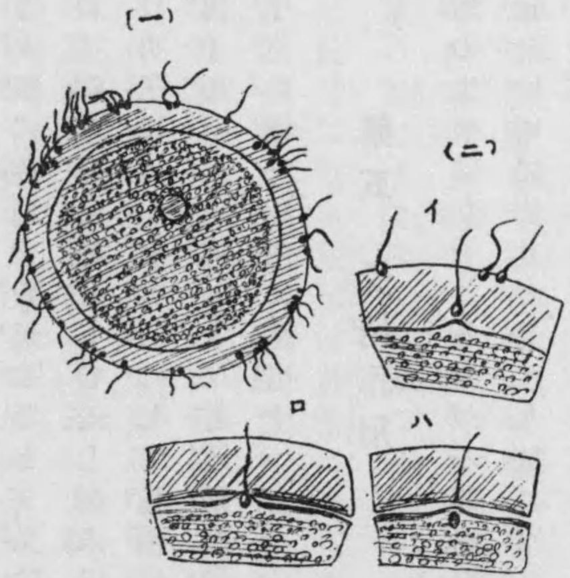
陰莖の勃起は陰莖海綿體に血液の充盈するに由りて起るものにして、此時に當り陰莖は其量に於て四乃至五倍の太さ加はり、長さ又著しく增大し且つ硬度を增加す。而して陰莖動脈擴張し、血行の亢盛を致すは勃起神經の營爲する處にして、其中樞は射精中樞に同じく腰髓にあり。而して勃起中樞に向つて興奮を傳搬せるもの一に陰莖の知覺纖維あり、二に大腦より來る纖維あり、三延髓中の血管擴張中樞より來る纖維あるが故に、陰莖に知覺刺戟を受けしとき、大腦に色情の發起せしとき、又は延髓の血行不順せしとき等に於て陰莖を勃起せしむ。蓋し婦人にも亦同一の現象あり、其の興奮は男子に比し漸次的にして且稍長く而して興奮極度に達すれば男子の射精に均しき反射運動を發起し、陰部神經の刺戟反射して子宮粘液を膣内に壓出す。

第五　受精作用

人類の生殖は女子より出づる卵細胞が男子より出づる精細胞との癒合作用に依りて爰に人類の原基を生じ、然る後ち漸次發育增大して遂に一個の人體を構成するものにして、即ち勃起したる陰莖の膣内に挿入せられて唧子狀に運動せらるゝや此間、陰莖の知覺神經は膣内壁の皺襞と摩擦し陰門括約筋の收縮等に依りて

刺戟せられ、其興奮腰髓中樞に傳搬し反射せられて終に射精運動を發す、是れ即ち交接なり。斯くして女子の膣内に排瀉せられたる精液中の精細胞は膣内に在りて自動的運動により漸次上方に進入し、終に輸卵管の上部に達して爰に始めて卵細胞に遭遇す。

第二十六圖　卵の妊孕



(一)精蟲に圍繞せらるゝ卵子
(二)卵子緣帶部擴大
イ　精蟲が膠樣膜に進入し且つ受胎丘を生ず
ロ　精蟲は卵子中に進入す
ハ　卵子中に進入せる精蟲頭は尾部と分離す

是に於て精細胞は無數に卵細胞の周圍なる皮膜中に群居し、此内一個先進の精細胞は直ちに深く卵細胞中に穿入す。然る時は卵細胞の表面を通じて蛋黄膜なるものを生じ、以て他の精蟲の侵入することを防止し、通例二個以上の精細胞穿入を許さず。斯くして受精したる卵細胞は漸次輸卵管を下りて子宮粘液膜の一部に達し、爰に固着して以て其發育の終るを待つ。即ち此發育しつゝあるの間を名けて婦人の妊娠と云ひ、此固着せる部は將來胎盤を形成するの部分たり。

第六　胚葉の發育狀態

卵細胞に穿入せる精細胞は其の尾部を消失し、頭部は男性前核となり、女性前核と共に著しく增大し相對向して移動し、核膜の消失の後ち兩核の核糸は紐狀片に分裂して混淆癒合するに至り、之

よりして更に核及び細胞の分裂に由て遂に三層より成る處の空胞を生ず。其外層を外胚葉、中層を中胚葉、内層を内胚葉と名け、之等三胚葉は日を逐ふて益々發育し、即ち外胚葉よりは腦・脊髓・感覺器・表皮及び皮膚の附屬物を發生し、中胚葉よりは筋肉・骨骼・結締組織・血液・心臟・血管及び泌尿生殖器を發生し、内胚葉よりは呼吸器・消化器及び之等の附屬臟器を發生す。

第七　分娩及び産褥

子宮内に於ける胎兒の發育は最後の月經後約四十週、即ち二百八十日を以て成熟完成す。然る時は母體より排出せらる、之を分娩と名く、此の作用は子宮壁の筋肉收縮に由て其の内容物即ち胎兒を壓出するに依るものにして、此の際陣痛と名くる一種の疼痛を伴ふ。而して子宮頸管は擴大して延長し子宮腔と膣とは一管となり産道を形成す。娩出の進むと共に卵膜は破裂し羊水は流出し、次で胎兒を分娩し、續て胎盤も子宮壁より剝離して卵膜と共に排出せらる、之を後産と云ふ。

子宮收縮の中樞は腰髓中に存し、而して子宮の主宰神經は腰髓及び薦骨髓より生ずる自律神經にして其の一部は交感神經が下腹神經叢を經て子宮筋に至り、一部は副交感神經が骨盤神經と共に直接に子宮に分佈す。

分娩後子宮は漸次收縮し粘膜の創面よりは一種の分泌物を排出す之を惡露と名く、惡露は始め數日間は血性なるも數日を經れば漿液性となり子宮粘膜の再生と共に消失す、此の期間を産褥と云ふ。

惡露は「をろ」と發音す

第八　乳汁の分泌

分娩後二乃至三日を經れば乳房は著しく膨大して乳汁の分泌を始むるに至る。

(一)乳汁の性狀

乳汁は白色不透明の液體にして兩性の反應を呈し特異の甘味と臭氣とを有す、其の比重は平均一・〇三〇にして八十七%の水と十三%の固形成分を含有す、其の常に白色不透明を呈するは乳汁中に微細なる球狀をなして多量に浮游する乳球の光線を反射するに由るものにして、其の數一竓中平均百萬乃至六百萬個を有す。

乳汁の固形成分は左の如し。

(イ)蛋白質　一・五%にして主として乾酪素(カゼイン)・乳汁蛋白質(ラクトアルブミン)及び乳球素(ラクトグロブリン)なり。

(ロ)脂肪　四%を含み主として「パルミチン」・「オレイン」等にして乳球となりて浮游す。

(ハ)含水炭素　七%を有し主として乳糖なり。

(ニ)鹽類　〇・五%にして就中燐酸「カルシウム」・燐酸「カリウム」・「クロールカリウム」等なり。

(二)乳汁の分泌

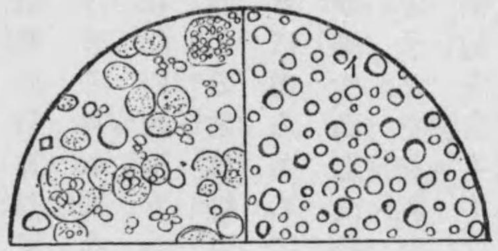
乳汁の分泌は哺乳の機械的作用のみならず、乳腺固有の機能と血壓とに由るものにして、分娩に始まり續いて小兒の哺乳期間絶へず分泌す、而して分娩後初日より約數日間は帶黃色濃厚の乳汁を分泌す、之を初乳(コロストルム)と云ひ、其内に脂肪粒を充滿せる有核細胞を含有す、之を初乳球と名け、其の鹽類等の異常成分に依

り下劑の作用を爲して初生兒の胎屎を排泄するの用あり。

乳汁を乳腺より排泄せしむること益々多ければ、益々多量の乳汁を分泌するを常とす、又食物にも大に關係するものにして殊に精神感動、例之ば憤怒・恐怖は血管收縮神經に其の影響を及ぼして、乳汁の分泌を著しく減少す、然れども分泌神經の關係に至つては未だ不明なり。

第二十七圖

乳汁顯微鏡所見



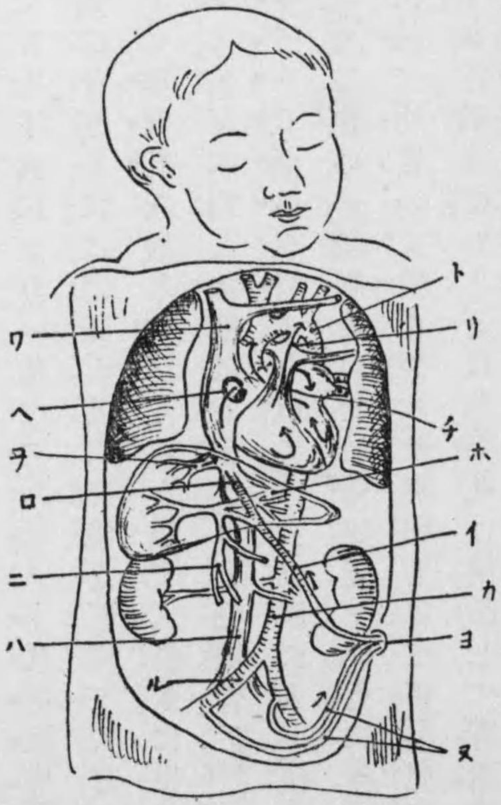
第九　胎兒の血行

胎兒は子宮內に於て卵膜と名くる一膜に由りて包まれ、臍帶に由りて母體と連結す。是れ胎生間は肺に於ける機能發起せざるを以て母體の血液は胎盤を經て臍帶に入り、後ち胎兒に移行し依て以て胎兒を榮養するものなり。

胎兒血液循環系統は一條の大なる臍靜脈ありて臍を過ぎて上

第二十八圖

胎兒血液循環



イ　臍靜脈
ロ　アランチー氏靜脈管
ハ　下大靜脈
ニ　門脈
ホ　肝臟
ヘ　卵圓孔
ト　大動脈弓
チ　肺動脈
リ　ボタリー氏動脈樣管
ヌ　臍動脈
ル　內腸骨動脈
ヲ　肝靜脈
ワ　上大靜脈
カ　大動脈
ヨ　臍

行して肝臓下面に至り、一部はアランチー氏靜脈樣管となりて下大靜脈に注ぎ、一部は門脈と共に肝臓を經て下大靜脈に合し、右房に至りて卵圓孔を通じ左房、左室を經て大動脈に出づ。而して上大靜脈より右房に還る血液は右室より肺動脈管（一部は之より肺に至りて肺を榮養す）を經てボタリー氏動脈樣管より直ちに大動脈に入り、後ち內腸骨動脈より起る二條の臍動脈を以て臍帶を通じ胎盤に至り、母體血液との間に於て物質の交換を營み、臍靜脈を以て再び兒體に還流す。而して生後呼吸を營むときは卵圓孔は閉鎖して所謂卵圓窩となりボタリー氏管は退縮して動脈樣靱帶となる。

生理學下編　終

第三編　鍼灸學

第三編　鍼灸學（前編の續き）

第十七章　刺鍼點

古來刺點に就て鍼科の說く處に據れば、凡そ諸病の起るは皆氣血の壅滯して宣通すること能はざるに由る、故に鍼して以て之を開通するものなるが故に、之を施して其効を得んには其臟腑と經絡とを詳にして以て邪氣の伏する處を洞見し、兪穴を取りて其肯綮に中たることを要すと記載せり。

經絡・兪穴の說は實に多岐なりと雖も、之を要するに病原の起る處は臟腑に基づき臟腑の脈は並に手足に出で腹背を循環し全身

菅沼周圭は醫家なり、鐵鍼皮肉を刺すに甚だ利にして氣血を傷はずと稱し鍼灸復古を主張し古方鍼と云へり鍼灸則、鍼灸摘要、鍼灸治驗等の著あり、正德四年（一三七四年）死

至らざる處なし、其經脈の出づる處、流るゝ處、注ぐ處、過ぐる處、行く處、入る處の諸點を名けて孔穴（穴）と曰ひ、鍼は總て此部を選びて施す。故に兪穴の部位を知り孔穴の主治を詳にすることは鍼科の金科玉條とせし處なり。（心臟・肺臟・肝臟・脾臟・腎臟を五臟と稱へ、大腸・小腸・膽・膀胱・胃・三焦を六腑と稱へたり）又孔穴の數は「醫心方」には六百六十穴を擧げ「千金方」には六百五十孔穴を擧げたり。又德川氏中世に於て古醫方の勃興するに際し鍼灸科も亦た復古せざるべからずと稱へし所謂革新派の代表者たりし攝津の人菅沼周圭氏の處說に據れば鍼灸に切要の經穴僅に七十穴のみなりとして經絡を言はず太陰・太陽の經を別たず、禁鍼穴・禁灸穴の類を取らず、補瀉迎隨は賊邪を驅りて癥癖を去るときは即ち瀉なり、邪氣を驅除して正氣回復すれば卽ち補なりと云ひて從來諸家の說を用ひず、人神

石坂宗哲は甲府の人、侍醫法眼に任ず、鍼灸約說、鍼灸知要等の著あり、又圖書に依て內景備覽を著はし人身解剖書の嚆矢をなす　蘭醫シーボルトと交遊あり　天保末年死す

行年血氣の類には一切拘泥せず、其用ゆる處は毫鍼にして鐵を用ひて之を製し鍼を用ゆるに淺深を豫定せず、病症の虛實輕重によりて之を取捨し其說く處諸家に異なれり。之を要するに其說虛妄を捨てゝ確に明驗あるものを取つて以て之を施すを則とするにありとせり。

又德川氏の季世文化年間（紀元二千四百六十七年前後）に吾が鍼科の面目を一新したる先哲石坂宗哲氏の如きは其學「內經」を主とし傍ら和蘭の說を採りたる人にして、孔穴を以て十四經に附するが如きは兒戲に近きものなりと早くも當時に於て說破したり。

飜つて元治元年（紀元二千五百二十四年）坂井豐作氏の刊行せる「鍼術秘要」の說く處に據れば今世の鍼醫と稱するものは口に十四經の經穴を唱ふと雖も、其鍼を刺すを觀るに腹痛には其痛む部の腹中を刺し、凝

坂井豐作は加賀の人、正神一刀流、荒木流に達し郡山藩に仕へ、後ち劍を捨てゝ小森氏に鍼術を習ひ横刺術を究めて之を主張す、鍼術秘要の著あり慶應年間より大阪に開業し明治十一年六十三歳にして死す

塊あるものには其塊の邊を刺し攣急するものには其攣急する處の筋頭を刺す之を以て其病經に中ることなし、若し病經に中ると有るも刺方正しからざるが故に鍼鋒微かに之に觸るゝを以て病の治すること甚だ稀なり。遇々治することあるも多くは鍼の効に非らずして病勢の自然に緩解するに因る者なりとなせり。著者之を按ずるに其神經性痙攣なるや炎症卽ち組織の變性・組織の新生・血液成分の滲出に依るものなるや、又腫瘤なるや將た神經性疼痛なるやを問はず猥りに局部に刺鍼せるものなるが故に遇々治するものあるも畢竟鍼効に依るに非らずして所謂自然の療能に依るに過ぎざるものなるべしとの意なるが如し。當時に在りて既に之を看破せし坂井氏の眼光亦た偉大ならずや。

刺點は要するに殆んど上述の如くにして定められたるものゝ如しと雖も、現今の學理上より之を見れば或は當を得たるものあり、或は全く當を得ざるものありて頗ぶる迂遠なるに似たるものあり。故に予は之等の諸說を斟酌し夙に輓近の解剖生理學に基づき骨・筋・內臟等の裝置・形狀并に血管・神經分佈の狀態及び中樞部の位置・末梢神經の裝置・其他諸臟器等の關係を察知し且つ生理學上の作用を詳にし併せて自己の經驗に由り自から刺點を定めて之を實驗するに顯著の効績を得たり偶々大久保適齋氏の所說を見るに及び從來予が經驗に由りて得たる刺點と大に一致し、舊來の諸說に比し確實に而かも理論稍や明確となり、從つて其効果も亦た著明なるを以て予は同氏の說をも併用し、採點を以下述ぶるが如く定めたり。

胸腔の疾病には之を頸部の交感神經及び迷走神經に求め、腹部

内臟に對しては腰部の交感神經及び腰椎神經に、手指の疾患には膊神經叢に其他下肢を腰神經叢及び薦骨神經叢或は坐骨神經及び股神經等に求むるが如し故に今其刺點を簡約して左右各十五點とす、卽ち項部は四點にして之を頸部第一位點・同第二位點・同第三位點及び副點とし、腰部は五點にして之を腰部第一位點・同第二位點・同第三位點・同第四位點・同第五位點となし、上肢は三點にして之を上肢の第一位點・同第二位點・同第三位點となし、下肢亦た三點にして之を下肢第一位點・同第二位點・同第三位點となす。然りと雖も是れ一に初學生の爲めに定めたるものなれば各處に於ける疾病の局處療法の如きは解剖學を基礎として術者の經驗を積むに任せて其欲する處に求めて可なるべし。

(一)頸部

第一位點　第一頸椎と第二頸椎或は第二・第三頸椎の横突起間に於て棘狀突起を去る左右一拇指の處にして淺層(分五)なる時は頸椎神經により反射的に迷走神經の心臟制止神經を刺戟し、深層(一寸以上)なる時は交感神經上頸神經節を刺戟し心臟の皷舞作用を呈す。

第二位點　第四頸椎と第五頸椎との兩側横突起間卽ち棘狀突起より一拇指左右に開く處に之を求め交感神經中頸神經節を刺戟するの目的にして、淺層なるときは第一位點の如く頸椎神經により反射的に迷走神經の心臟制止作用を呈し、第一位點と其効用相等し。

第三位點　第六・第七頸椎又は第七頸椎と第一背椎との兩側に於て上下横突起間を目的とす。之を探ぐるに第七頸椎(椎大)の棘狀突起を標準となすべし、卽ち外後頭結節より肩胛間に至るの間に於

て最も隆起して觸るゝ突起是れなり。其淺層(分五六)手術は肩背の諸筋及び腦に對する誘導法として之を行ひ、深層(寸約一)手術は頸の交感神經下頸神經節及び下頸叢の一部を刺戟するの目的なり。

第四位點　卽ち副點は後頭骨の直下、乳嘴突起の後方上約五分の處陷凹せる部(風池)にして淺刺す。是れ頸椎神經より腦神經に對する反射作用を目的とせり。

尙ほ上記の外に頸部の刺點は局處の疼痛・筋肉の痙攣・痲痺・僂痲質斯及び腦疾患に對し、頸椎神經より反射的に或は誘導的に、又は直接刺戟法として廣く應用せらるべし。

(二)腰部

第一位點　第十二背椎と第一腰椎(三焦兪)或は第一・第二の腰椎横突起間(腎兪)にして(鍼尖少しく內上方に向け)深層(以上二寸)は太陽叢及び大・小內臟神經の枝別に刺戟の傳搬を計る目的にして、淺層(以內一寸)なるときは腰椎上位神經を目的とす。

第二位點　第二・第三腰椎棘狀突起の兩側上下横突起間(氣海兪)にして棘狀突起より約一寸左右に開きし處、卽ち薦骨脊柱筋部に求め深層(寸二)なるときは小內臟神經及び太陽叢を目的とし淺層(寸一)なるときは腰椎神經を目的とす。

第三位點　第三・第四腰椎横突起間(大腸兪)にして棘狀突起より約一寸左右に開きし處卽ち薦骨脊柱筋部に求め、深層(寸二)は專ら腹部動脈幹叢及び下腸間膜叢を目的とせり。而して腰椎神經を目的とする場合には淺刺(分五)す。

第四位點　第四・第五腰椎横突起間(關元兪)又は第五腰椎横突起と薦骨翼との中間(小腸兪)にして同じく棘狀突起より約一寸左右

に開らきし處とし、下腹叢に對する目的を以て何れも深層(一寸以上)鍼なり。又腰椎神經及び薦骨枝を目的とせば淺刺す。

第五位點　第一乃至第四後薦骨孔(八髎)中にして薦骨神經及び直接子宮叢に刺戟を與ふるを目的とせり。

以上腰部點も又局處の疼痛・筋肉の痙攣・痲痺・僂痲質斯等に對して直接刺戟を與へ、或は內臟疾患に對して、或は反射的、或は誘導の目的にも應用すること極めて多し。

(三)上肢

第一位點　前膊部前面の正中線に於ける中央部にして長掌筋の中部即ち郄門に之を求め正中神經を目的とす。

第二位點　橈骨小頭を外下方に向つて去る凡そ一寸五分の處膊橈骨筋上端の部位に於て橈骨神經及び外膊皮下神經を目的とし即ち三里に刺點を求む。

第三位點　拇指と示指との骨間即ち第一掌骨と第二掌骨との骨間の中央部即ち合谷に之を求む。是れ即ち橈骨神經前枝の手背枝を目的とせり。蓋し前項の三里と本點とは共に能く腦疾患に對する誘導法及び反射的作用等に應用すべき要點とせり。

(四)下肢

第一位點　坐骨結節と大轉子との中間にして其中央部の指壓して稍や抵抗の少なき部位(約環跳)を採りて刺點とす。是れ坐骨神經の起根部なるを以てなり。

第二位點　前脛骨筋と長總趾伸筋との起始間に於て長總趾伸筋に倚す是れ脛骨上端と腓骨上端との關節部より約二寸下方の稍や內側に寄りたる處、即ち三里に刺點を求む。是れ深腓骨神經に

刺戟を與ふるものなり。

第三位點　下腿內踝の上二寸五分の處、卽ち內踝の一握上の示指上緣に於て脛骨の後緣、長總趾屈筋の後側卽ち三陰交に刺點を求む。是れ坐骨神經の一系たる脛骨神經の下端に當り、同神經及び內外足蹠神經に刺戟を與ふるを目的とせり。

以上の諸點も又腦疾患及び腹部內臟の疾患等に對する反射的又は誘導の目的に往々應用し、或は同じく處領の神經痛・筋肉の痙攣・痲痺等に直接刺戟法として往々應用すべし。

以上は施術上重要なる手術點として其規範を示せるものに過ぎず。上述の如く素より筋・神經等の分佈の狀態に對照し臨機應症の刺點等は種々あるべし、然れども這は爰に略し病理學編に於て各病門に就て一々適當の刺點を詳記すべし。

鍼治に就て第二回日本聯合醫學會誌（明治四十年）

第十八章　鍼の身體に及ぼす變化

鍼の身體に及ぼす變化に關しては、從來普通刺鍼と皮膚鍼、所謂小兒鍼とに就て二三學者の實驗成績を出だし、漸く闡明の域に近かんとせり。

曾て醫學博士三浦謹之助氏は鍼治法を實驗せる結果、(イ)家兎には刺戟部の上方にては腸管の攣縮を起し、下方にては弛緩を起すを以て蠕動の制止が腹痛を緩解する効あるものならんとし、(ロ)施術部の神經纖維に變性を呈し、以て興奮性を減ずるを見、知覺纖維も亦之に同じからんとし、(ハ)蛙の坐骨神經を刺戟するときは蹼膜の血管收縮し、血行緩徐となるを見る、之を以て觀れば鍼術は一種の痲醉劑の如く作用するものなりと報告せり。

後藤著ヘッド氏帶と我邦古來の鍼灸術に就て中外醫事新報第七六三號（明治四十五年）
同著ヘッド氏帶と鍼灸術に就て京都醫學會雜誌第十一卷（大正三年十月）
藤井著小兒鍼に關する研究大阪醫學會雜誌第二十八卷（昭和四年）

醫學博士後藤道雄氏はヘッド氏過敏帶の存在を證明し、同時に內臟疾患に對する主なる經穴を研究し、ヘッド氏帶と經穴との關係を研究して是等の經穴は殆どヘッド氏帶と一致するものなりとし、痛覺及び溫覺過敏なるヘッド氏帶に鍼灸を施すときは反射的にヘッド氏帶に一致する內臟の疼痛を緩解して自覺症を減じ得るの理なりと說き、以て鍼灸治療の學理に一道の光明を與へたり。

近時醫學博士藤井秀二氏は大阪醫科大學小兒科教室に於て小兒鍼に就て系統的に研究せる業績を發表し、以て小兒鍼に關する學術的根據を闡明する所多大なり、今之を左に記述すべし。

一　鍼の白血球に及ぼす影響

家兎に就ての實驗に依れば假性「エオジン」嗜好白血球の增加並にアルネット氏核左方偏移を現はす、而して白血球增加度とアルネット氏核左方偏移の最高度とは一致するものにして、即ち小兒鍼により幼若白血球の多數出現するを示すものなり、而して小兒鍼は反覆施術期間中、此變化を現はす、乳兒及び年長兒に施術したる場合も亦其成績を同じくす。

二　鍼の血液抗體に及ぼす影響

家兎實驗に依れば健常凝集素を增加し、又健常溶血素も增加するも其量は凝集素に及ばず、然るに免疫凝集素及び免疫溶血素は共に健常のものよりも增加するを見る。

三　鍼の血淸に及ぼす影響

家兎實驗に依れば血液中の「フイブリノーゲン」量は成熟家兎に於ては增量し、幼若家兎にては不定なり、其他血淸屈折率及び粘稠度等には變化を及ぼさず。

四　鍼の血管運動神經に及ぼす影響

藤井博士が醫學士竹內五郎氏との共同研究に依れば、人體並に家兎共に皮膚鍼によつて皮膚の血管に對し收縮作用を呈し、之は遠隔部皮膚刺戟によるも惹起せらるゝものにして、「アトロピン」注射によりて增强し、交感神經節の切除によりて減弱又は消失するものなり、又大腦表面の血管を收縮せしめ、小腸表面の血管には擴張作用を呈すと云ふ。

五　鍼の腸運動に及ぼす影響

藤井・竹內共著　小兒鍼の血管に及ぼす影響　大阪醫學會雜誌第二十八卷（昭和四年）

小兒鍼は小腸運動を一過性に亢進せしむるも、爾後急速に減弱して暫時持續し、後ち次第に舊に復歸すと云ふ。

六　鍼の血壓・呼吸・體溫・腎臟に及ぼす影響

藤井・竹內共著　小兒鍼の腸運動に及ぼす影響　大阪醫學會雜誌第二十八卷（昭和四年）

小兒鍼は血壓・呼吸・體溫には何等の影響を與へず、腎臟に對しては多くは蛋白質の排泄を見ることなきも、少數には一時性に尿中蛋白質を證明することあり、而して腎臟の色素排泄機能は多くの場合には亢進するを認めたりと云ふ。

以上藤井博士の實驗の結果に由て、小兒鍼の身體に及ぼす作用に就き考察されたる所に依れば、白血球の增加は、鍼の刺戟が皮膚知覺神經纖維を介して交感神經の興奮性を高め、以て骨髓機能を亢進せしむる結果にして、網狀纖內被細胞系も亦之に關與するも

網狀纖內被細胞系統とは血

管及淋巴管の內被細胞、脾竇細胞、淋巴腺、副腎、腎臟髓質細胞、腦下垂體、組織球及血中の組織球性白血球等を稱す

のとせり、是れ一には「アトロピン」注射の如き交感神經の緊張を亢進せしむるときは其現象著明となると、一には網狀織內被細胞系を充塡するときは血像の變化を現出せざるを以て之を推理することを得べく、又抗體の增量に就ても網狀織內被細胞系の亢奮に歸すべきものにして、要するに交感神經の緊張狀態を以て之を說明すべきものとなせり。

七　鍼の骨發育及血液性狀に及ぼす影響

水野著鍼術の生物學的研究日新醫學第二十一卷（昭和七年）

以上は主として小兒鍼に就ての實驗なるも、又皮膚刺戟鍼並に刺鍼に就て醫學博士水野重元氏が大阪帝國大學醫學部病理學教室に於て實驗したる成績に依れば、皮膚鍼及び刺鍼共に一定適量（皮膚刺戟鍼三十秒、刺鍼なれば六鍼）を幼若家兎に施術する時は、施鍼個所の如何に關せず管狀骨に著明なる「アルカロージス」性變化を惹起し、又此等を一定適量以上に施すときは反對に著明なる「アチドージス」性骨病變を呈す、血液性狀の變化も亦之に同じ。

又血液「アチドージス」を惹起せしむべき食物（蔗糖・牛蛋白・牛脂肪）を與へて適量（前に同じ）の皮膚鍼及び刺鍼を施すときは、骨に對する「アチドージス」性病變を一定度まで完全に抑制す。

施鍼の此の如き生物學的影響に就ては知覺神經を介して交感神經緊張狀態を惹起せしめ、同時に血液「アルカリー」濃度の增加に基因するものなるべしと說明せり。

アルカロージスとは血液中に炭酸其他酸性物の缺乏せる狀態をいふ

アチドージスとは前と反對に身體中に異常酸が過量に存在する狀態をいひ、孰れも病的狀態にして骨に著明の變化を生ず

第十九章　鍼治作用の理論即ち効驗

鍼術奏効の理如何に就ては、古來より紛々の諸說ありて一も首

肯すべきものを見ず、而して前述泰西醫學に通じたる石坂宗哲氏の說に見るも、其「知要一言」中に鍼術の理を述べて曰く「竹木・トゲの身に立ちたるも、金銀鐵の鍼の身に立ちたるもトゲなり、誤りて立つと術有つて立つとの相違あるのみ、竹木のトゲ立ちたらば、人力の及ぶだけは拔き去るべし、若し人力にて拔けざれば其人の自然の元氣をもつてトゲのある所に熱を生じ、漸々精神榮衛ともに集りて、そのトゲの有る所を愈々熱を盛にして、その熱に腐れて膿となり、人力にては拔けざる所、その膿と共にくづれて身の外に拔け出るなり、膿出でゝ熱のぞき、もとの無傷の身となる如し、術ありて金銀鐵の針金を病のある所に刺し入るれば、竹木のトゲのある所に熱を生ずるが如く、精神榮衛ともに力を入れて針の下に積り來るなり、暫らく鍼を留め、程よく鍼の下に集めて、その鍼を拔去れば集り來る精神榮衛にて病邪を追ひ散らして、忽ち消え去ること、風の雲を吹くが如し」と、述ぶる所、淺薄奇矯に過ぎ毫も學術上に基礎を有せず、又陸舟庵氏が其著「養生訓」に述ぶる所に依れば、人身窮理上、鍼術は轉機療法に屬するものとし、轉機療法とは此部の機動を彼部に轉じ換ゆるを云ひ、譬ば胃中に害物ありて胃神經を刺戟すれば胃神經抗抵を起し、胃痙・胃痛を發す、此時に當て鍼を腸の一部に施せば神經更に其部に抗抵を起し非常の運動を發す、是に於て胃中の變動、其機を轉じて腸部に移る、故に胃痙・胃痛の寛解を覺ゆるが如し、又患部に向て直ちに鍼を下すことあり、是亦鍼の刺戟を以て其部の變動を轉換せしむるなり、劇症に至ては鍼の刺戟の力、患部の變動に勝つこと能はず、故に其驗を得ざるものなりとし、聊か神經反射作用の學理に觸接するに至れり。

東京私立病院長
日本醫學會誌
（明治四十年）

醫學博士木村德衛氏は之に就き實驗せる成績を發表して曰く、鍼術は確かに興奮を去ることは明かにして、從つて又誘導ともなるものなり、即ち其部の興奮する時は其所に充血を來すべきは生理學の教ゆる所なり、故に他部に貧血を起すべきことも是亦生理學の說明する所なり、從つて今此理を少しく述べんに、先づ刺鍼すれば鍼を刺されし神經若くは筋肉には之が器械的刺戟となりて興奮を惹起する爲めに又前述の誘導ともなるものなり、而して之を如何なる疾病に應用すべきかと云ふに、第一、神經痛なり、特に坐骨神經痛には最も宜しく五人の實驗上三人は全く治し一人は既に神經實質が變性せるものなりし爲め手術を加ふるも猶ほ治し能はざりし者故、治癒せしめ得ざりしは是非なき事と云ふべく、又他の一人は央ば治に赴けり、此の他の神經痛には効ある事は確實にして此効を奏する所以は、鍼を刺されし神經は其鍼が機械的刺戟となりて、化學的變化を惹起す、從つて神經にある疼痛は去るものなり、而して之は一時的なるも之を屢々行ふときは遂には常習となりて全く疼痛を忘るゝに至るものならん。次に神經に於ては痲痺にも効果ある事は確實にして、之は機械的刺戟を屢々與へて興奮を進め同時に痲痺の爲めに當然來る所の榮養不良を補ふて行くことを得べきを以てなりと說明せり。

駒井博士は灸治が內臟の疼痛を治するは灸刺戟と內臟知覺刺戟とが求心性神經路に依て腦中樞に傳達せられ此處にて互に干涉して制止し合ふに依るものと看做せり

又前記後藤博士は曾てヘッド氏が內臟疾患に際して其臟器に相當する皮膚の或一定部位に知覺過敏帶あるを研究發表せし所謂ヘッド氏帶と鍼灸術との關係を新たに研究して鍼灸治療の原理を闡明せんと試みたり、即ち同博士の所說に依れば經穴とヘッド氏帶とは內臟疾患の鍼治に對しては多くの場合、其部位の一致

することを證明し、其結果、經穴なるものは古來の經驗によりて得たるヘッド氏帶により定めたるものにして、從て痛覺及び溫覺過敏なるヘッド氏帶に鍼灸を行ふて痛覺或は溫覺を與ふるときは反射的に其ヘッド氏帶に相當する內臟の疼痛を減じ自覺症狀を輕減し得べき理なりとせり。

此所說に就て著者は鍼灸學の權威上、一言を費さゞるべからざるものあり、後藤博士がヘッド氏帶と經穴との一致點を認めたることは古來の經驗に成りし經穴を學理的に導きたりし貴重なる研究なるも、此關係を說明するに當りては、氏の所說と反對にヘッド氏の決定せし知覺過敏帶の存在は、古來の經穴ありしがために其確實性を得たるものと云ふべく、決してヘッド氏帶のために經穴が其價値を增せしにあらざることを附言せんとす。

小兒鍼療法、蛋白體療法、灸療法の三者の差異點

藤井博士に依れば小兒鍼の治效を呈する作用は前記の如く交感神經緊張狀態を以て說明すべしとし、而して小兒鍼が身體に發する反應は蛋白體療法及び灸治の三者必ずしも相一致せざる點あるを見、例へば白血球數に於ては、灸は白血球增加症に前驅する白血球減少症を認めざるも、蛋白體療法と小兒鍼とには之を認め、アルネット氏核左方偏移は灸に於ては未だ文獻なきも小兒鍼及蛋白體療法の二者は共に左方偏移を現はし、血管は蛋白體療法に於ては一定せざるも小兒鍼及灸の二者は共に收縮し、只灸に於ては收縮後擴張するも小兒鍼にては舊に復歸す、健常凝集素及び健常溶血素は小兒鍼に於ては增加するも蛋白體療法及灸の二者には何れも變化なく、免疫凝集素及免疫溶血素は三者共に增加する等、以上三者の差異より考察して、小兒鍼の治効は蛋白體療法並に

刺戟療法等と同類に屬するものなるも寧ろ之を一種の變質療法と看做すを適當となすべく、從つてアルント・シュルツエ氏の所謂生物學的原則に依る(イ)弱き刺戟は生活機能を衝動し(ロ)中等度の刺戟は之を旺盛ならしめ(ハ)强度の刺戟は之を抑制し(ニ)最强度の刺戟は之を停止せしむるといふ原則に依りて小兒鍼は生活機能を煽動せしむる最も弱き刺戟を生體に與ふるものにして、刺鍼の如く別に經穴に依るにあらずして强壯療法として有効なるものなりと云へり。

小兒の强壯療法としての小兒皮膚刺戟鍼の作用は現在に於ては先づ此説明を以て滿足すべく、又一般に使用する刺鍼の作用に對しても亦皮膚刺戟に依る交感神經緊張狀態と共に網狀織内被細胞系の關與するものなることは、血液「アルカロージス」の發生並に骨の「アルカロージス」性變化を惹起することに依て之を知るを得べし、然れども之を以て刺鍼の治効作用を完全に解説し得るやに到りては未だ全然首肯すること能はず、尚ほ反射作用の他に神經纖維直接の傷害による反應乃至電氣的作用等複雜微妙なる作用の存在を認めざるべからず、而して内臟疾病に對する治効に就ては此等と共に所謂ヘッド氏知覺過敏帶による反射作用を看過する能はざるものにして、即ち古來久しく經驗せられし治療點たる經穴を標準として應用するにあらずんば其目的を達することは能はざるものたることを了解すべく、尚ほ進んで之を闡明するには將來自律神經に關する實驗的研究の成績に待つもの多かるべきを疑はず。

第二十章　鍼術の應用

一　鍼治の病體應用（又作用）

鍼術は古來より急性と慢性とを問はず諸症に應用せられ、機質的疾患と雖も、能く効果を示し、殊に官能的疾患、例へば神經痛・神經痲痺・筋の痙攣等には最も適し又疾病の初期に能く應用せられ、天然的生活機能を催進して、新陳代謝を旺盛ならしむるが如き作用あるを以て、殊に疾病恢復期に臨みて腹部内臓に對する腰部鍼の如きは消化器及び榮養機能を振起して消化力を進め、且つ胃の運動及び腸の蠕動を亢進し以て吸收を促がし、亦糞尿の排泄をも良くして精神機能を調整し、自然に恢復期を短縮せしむる等の効用

を有するものなり、從つて其適症に向つて應症の鍼治を施せば、其病症により實に醫療も尚ほ及ばざる偉効を奏することは既に古今の斯業家の實驗するところなり、然れども鍼治療も亦醫療に於けるが如く萬病之に因りて治を期し能はざることは深く顧慮せざるべからず。

病體の應用に當り其神經機能の應調には神經の種類に從ひ各其作用を異にするものゝ如し、其一二例を示せば次の如し。

（一）知覺神經枝　知覺神經の興奮して神經痛を起し、若くは知覺の過敏を來せるものには比較的長く強く刺戟を與へて之を制止・鎮痛すべく、又機能の減弱して痲痺乃至知覺鈍痲を來せるものにありては之に短かき刺鍼刺戟を加へて以て其興奮性を奮起、回復せしむるが如き作用を發起し得べし。

(二)運動神經枝　運動神經の興奮して所領筋肉の間代性若くば強直性痙攣を起せるものに於ては、神經痛の如く同じく制止法に因りて鎮靜、緩解の作用を起さしめ得べく、又之に反して痲痺、或は機能の減衰せるものに方りては又興奮法に依り其機能を興起、收縮せしむるの目的を達せしむるが如き作用是れなり。

(三)交感神經枝　即ち内臟神經の機能亢進して胃腸の運動の旺盛せるもの、或は心運動の急促せるもの、若くば分泌機能の旺盛せるもの等に在りては何れも交感神經に對する、制止的手技に由り之が變常を調整して鎮靜せしめ、又之と反對に交感神經の機能減衰して前記諸機能の衰弱せるものに向ひても同じく刺鍼に由る興奮法に由り是れ亦調整するの作用を呈せしめ得べし。彼の交感神經に對する腰部鍼に由りて消化機能の催進を計り、若くば減弱せしめ得るは、全く此作用に他ならざるなり。其他、血管神經に對しても各々刺鍼刺戟の度に從ひて、或は擴張し或は收縮せしめて血液灌漑の正整を計り得るのみならず、之に由りて誘導の目的を達し且つ炎症性滲出物の吸收を促し、又榮養神經に對しても同樣其機能をして旺盛せしめ得るなり。而して神經纖維は互に相連合せるのみならず、多數の纖維相集合して一の神經幹を形造れるにも拘らず、而かも刺戟を受けたる神經纖維のみ刺戟を傳達して敢へて隣接せる他の神經纖維に波及せざるは生理學上に謂ふ所の絶緣傳導の規則に由るものなりとす。又大久保適齋氏は刺鍼刺戟の病的神經纖維の幹に波及して敢へて他の纖維に移行せざるは一の撰擇機能に由るものにして恰かも藥品のそれに於けるが如く唯だ病變を來せる臟器にのみ作用するものゝ如く、又病的の神經

は常に他の神經に比し感受力の鋭敏なるに由り他の刺戟を待ちて常態に復せんと欲するものゝ如しと云へり。

二　鍼治の健體應用（又作用）

(一)知覺神經枝に刺鍼する場合に於ては其部に「ロイマチス」樣の疼痛を感覺し、拔鍼して神經枝より隔離すれば其疼痛直ちに止む。然れども其刺戟餘りに强烈に過るか若くば深刺する時は神經又は其部組織の損傷或は破壞を來さしむ事あるやも知るべからずと雖も通常の刺戟は求心性により中樞に傳達し中樞細胞は興奮して更に其興奮を遠心性により末梢に向つて傳搬し以て所謂反射運動を起し同處の筋肉を收縮し或は弛緩せしめ又は血管を初め收縮せしめ、後擴張せしむべし。然れども若し刺戟をして連綿持長せしむるか、或は過度ならしむるときは神經は疲勞を起して興奮性爲めに減衰し甚しきに至りては全く消滅し、其傳導機能を失するに至ることあるべし。

(二)運動神經枝に刺戟する場合に於ては分佈せる處の筋肉に痙攣を發し刺戟を停むれば其現象直ちに止むべし。而して若し連綿過度に刺戟せば知覺神經枝に於けるが如く、同じく興奮性の減少を來し或は痲痺を發し、運動障碍を來すことあるべし。然れども病的の痙攣・疼痛に當つて巧に刺入し刺戟の緩急・强弱宜しきを得ば假令深刺するも淺層の筋には敢て疼痛を感ぜしめずして次位の深層筋に達して一種の快感を起し、牽て疼痛・痙攣を緩解し得るは實驗に徵して明かなる處なり。

(三)交感神經枝に刺鍼せし場合に於ては其分佈する處の臟器

に少しく緊張様の感を起し、後ち聊か機能の旺盛するを見るべし。而して手術に熟達せば巧に人をして睡眠せしめ、醒覺後殊に精神に爽快を感ぜしむ。

三　豫防鍼

灸術には豫防灸並に養生灸と唱へ、古來より之を實行して良好の成績ありしことは既に人の知る所なり、鍼術に於ては小兒鍼の如き疾病治療以外に豫防若くは保健の目的に施術せらるゝことは既に久しく、世人の信用は鍼術の學術的研究と共に益高まりつゝありて著しく治療界に進出するに至れり。

刺鍼に在りては保健上の目的として未だ小兒皮膚鍼の如き有効なる實施を見ざるも、石坂宗哲氏の校に成る「鍼灸廣狹神倶集」に

深さ三寸は同指寸にするも尚ほ深きに失す、原著者の意今知るべからざるも深刺するも七八分を超ゆべからざるか

は萬病一如の穴を記し、病の未だ出でざるに鍼して大病の來らんことを防ぐには、腹部にては陰都、中脘の傍ら相去ること各三寸、深さも亦三寸、背部にては脾胃の腧、深さ人に依るべく、右の兪穴を毎月上旬の内に續けて三日するときは其月必ず大病を受けずと記せり、是亦實驗上より出でたるものなるを以て一概に妄說として之を卻けず、將來進むで之を究め以て斯術の開拓に資せざるべからず。

第二十一章　鍼術の適應症及び不適應症

鍼術の適應症とは常に鍼術を施せば効驗速かにして且つ奏効顯著なる疾病を指せり、其理由は既に論述するが如く神經官能的の疾患即ち諸臟器等に於ける機能の旺盛又は減衰及び腦・脊髓等

の官能的諸般の疼痛又は知覺及び運動の痲痺・痙攣・小兒の夜泣等の神經系諸病に於ては最も特異の効果あり、殊に患者の身體に治癒能力を保有する時に適し、又疾病が現狀を維持する狀態に於て經過する時は最も適應す。今其適應症の重なるものを擧ぐれば左の如し。

消化器に於ては扁桃腺炎・耳下腺炎・胃「カタール」・神經性消化不良・胃痙攣・腸「カタール」・神經性腸疝痛・痔疾。

泌尿生殖器病に於ては腎臟炎・膀胱「カタール」・膀胱痙攣・淋疾・尿道「カタール」・睾丸及び副睾丸炎。

血行器病に於ては神經性心悸亢進症・心胸絞搾痛。

運動器病に於ては急性關節「ロイマチス」・急性筋肉「ロイマチス」。

神經系病に於ては各種末梢神經の神經痛・痲痺・幷に痙攣・脚氣「ヒステリー」・書痙・偏頭痛。

小兒病に於ては小兒急癇・夜驚症・消化不良症・腸「カタール」・遺尿症。

婦人病に於ては官能的子宮痙攣・月經困難及び過多症・乳房炎。

眼科病に於ては眼瞼緣炎・單純性結膜炎等是れなり。

其他鍼術は消化機能及び榮養機能を喚起する處の作用を發起するに由りて考ふるも又適應症となすべく、從つて諸病の快復期に施せば其治癒を促進して自然快復期を短縮せしめ、從つて續發病を防ぐの効あるものとす。

不適應症とは施鍼が啻に無効無害に屬するのみならず、稀には危害を招致するの虞れある疾病を云ふものにして、即ち心臟瓣膜障碍・頑固なる慢性の腦脊髓性疾患・慢性の皮膚病・熱性諸症・慢性傳染病・寄生蟲病・其他効顯の疑はしきもの等にして、間々患者に對す

る慰安の目的に施鍼する事あるも、之等の疾病に對しては務めて其施術を避け、斯業者たる者、徒らに施術を貪るが如き事あるべからざるなり。

第二十二章　鍼術の禁忌症及び禁忌點

「内經」に曰く熇々の熱を刺すことなかれ、渾々の脈を刺すこと勿れ、漉々の汗を刺すことなかれ、大勞の人を刺すこと勿れ、大飢の人を刺すこと勿れ、大渴の人、新に飽ける人、大驚の人を刺すことなかれといへり。又曰く形氣不足、病氣不足の人を刺すことなかれ、是内經の戒なり、是皆有瀉而無補を謂ふなりと「正傳」にいへり。又浴して後ち即時に鍼すべからず、酒に醉へる人に鍼すべからず、食に飽きて即時に鍼すべからず、鍼醫も病人も右「内經」の禁を知りて守るべ

熇々とは熱の熾んなる貌
渾々とは血の流るゝ貌
漉々とは汗の流るゝ貌

しと貝原益軒は戒めたり古來の經驗は之を輕んじ又決して蔑るべからざるものあり。

茲に述べんとする禁忌症とは施鍼して効を奏せざるのみならず、所謂有害無効となるべき病症を云ふ。例之ば急性腹膜炎の如き又は盲腸炎の如き或は諸種の癌腫を始め或は悪性の腫瘍の如きに對する局處手術及び法定傳染病并に破傷風・丹毒其他總ての發疹性の熱性急性傳染病等は最も警戒し禁ず可きものとす。若し斯の如き患者に接し術者徒らに施術する等のことあらば只に患者をして不幸の運命に陷らしむるのみならず、術者は勿論延て我が鍼術の信用に關係を及ぼすべきこと尠からざるを以て苟も手術を施さんとするものは恒に能く留意して其禁忌症を鑑別せざる可からざるなり。

又禁忌點とは身體の健否を論せず、常に刺鍼を施して災害を釀生する處の部位なるを以て深く警戒し且つ禁ずべき點となせり。即ち百會（殊に小兒の門）延髓部（門痙）の深刺・眼球・喉頭・氣管・肺臟・心臟・睾丸及び頸動脈・腋窩動脈・橈骨下端に於ける橈骨動脈の如き總て大なる血管の表在部或は腹部の諸臟器等に直接刺鍼する等、尙ほ姙娠の疑ある子宮鍼は勿論、其他頭部・頸部・胸部等の貴要器官の存在する部位は不熟練の者は努めて施術を避けざるべからず。然らずして猥りに之等の諸點に刺鍼する時は實に測るべからざる危險に遭遇することあればなり。故に解剖的部位を知悉して不慮の危害を招かざることに注意すべし。

蓋し經穴學上に於ける所謂禁鍼穴及び禁灸穴は更に經穴學編に說述する處ある可し。

第二十三章　體中折鍼に就て

鍼體に微傷あるもの又は屈曲を强伸したるものは刺入中時として患者の急動・咳嗽等により急に筋肉の攣縮又は强直を起し、爲めに其部より鍼體折斷することあり。此際施術者は猥りに患者に告げ驚怖の念を起さしめず、術者心を靜めて患者を動かしめず押手の周圍を强く壓迫して刺鍼部を探り、鍼の皮下に顯はるゝ時は爪又は「ピンセット」を以て摘み、靜かに拔出すべし、若し深部に於て碎折し外に顯はれざる時は其儘になし置くも敢て何等の危害あることを聞かず、只其當時二三日の間は局處に於て刺すが如き疼痛或は筋肉攣縮・强直するが如き感あるのみ。然れども時日を經るに從ひ異狀なきに至るものとす。而して折れ込みたる鍼體に就て

は體溫の爲めに酸化消滅すと云ひ、或は遂に體外に脫出すと云ひ、又は永久存在せりと云ひ、或は筋の運動により他部に移動するものなりと云ひ、諸說紛々として未だ是非を確定せざるが如し。

而して先哲杉山和一氏は白梅を嚙で塗付するか或は鼠の腦髓を摧きて塗付するときは時日を經て他部より拔鍼すと稱し、又或る說に依れば錦木の實を內服せしむれば拔鍼すとの如き妄說空論は一も信ずべからずと雖も嘗て體中に折鍼せられたる患者の言を聞くに其自覺的症候皆同一にして例之へば項背に於て刺折したるときは其當時三四日間は局處の運動の際聊か强直樣の感を起せども、其症大概四五日にして自から消散し敢て宿患を殘さず、又數年を經るも折鍼の他に移轉したるを覺えずと眞に然り。嘗て門弟某をして著者の自體腰部に刺鍼實習せしめたる際、鍼體に微傷のありたるをも知らずして使用せしか誤て七分程折鍼したることあり、當時實驗する處に依るも亦之に同じかりき。彼の裁縫針の身體に入り或は嚥下したる時の如く他に移轉し、又は自然に脫出したるものとは自から其趣きを異にせり。去れど未だ解剖の結果折鍼の體中に於ける變化を實驗せず、故に初學生の爲め茲に三浦博士及び大久保醫學士の動物試驗成績を引證し以て參考に供せんと欲す。

第一種は雌兎の齡七箇月のものにして、該兎の左側終末胸椎の橫突起と第一腰椎の橫突起との中間に六番鍼大凡八分計り折斷したるに、其第一日目は運動活潑にして人の之に接近すれば奔走跳躍す。第二日目に於ては漸く擧動靜肅にして刺處に觸るれば跳躍せり。第三日目は刺處に觸るゝも跳躍せず只だ該部を壓すれば

少しく筋惕をなすのみ。第四日亦然り。第五日目に至れば該部を摩擦し且つ壓するも筋惕を發せず、爾來壯健にして孳尾し受胎分娩したるに、初生兒又健全なり、其後六箇月を經て之を解剖に付せしに鍼體の刺入したる眞皮の裏面及び皮下結締組織に長さ五糎、幅一・五糎の色素滲潤して青藍色を呈し、其下層筋鞘も亦た然り、而して鞘内の筋質及び腹腔壁面の漿液膜には別に刺點の踪跡を見ず、又筋層間に於て更に折鍼の通過したる踪跡を呈せず、因りて内臓を悉く精檢し、又筋肉を寸斷して之を精檢するも更に折鍼及び其踪跡を發見せざりき。

又別に雄兎の左側第二腰椎と第三腰椎との横突起間に六分餘刺折し、八箇月後に剖觀せしに更に又折鍼の踪跡を認めず、故に其尖端の鋭利なるにより運動の際筋收縮に從つて移轉脱出したるものと假定し、更に鍼尖を鈍となし之を雄兎の右方第一腰椎と第二腰椎との横突起間に刺入折斷し十四箇月にして剖觀するに、刺入局部更に異狀なく其折鍼は轉じて肝臓の左葉に至り後方より前方に地平に潜在せり、而して其周圍更に炎症の現存するものなく、其折鍼現存の狀新に刺入せる觀を呈せり、而して鍼體は酸化して黑色を呈し、又鍼の重量に於ても初め〇・〇三五のものを刺折したるに〇・〇一五となり、即ち〇・〇二を減ぜり。此減量に就て考ふれば酸化溶解したるものに他ならず、故に古人溶解の説亦た妄ならざるべし。

其第三種に於ては鍼體の容易に移轉せんことを恐れ、之に附するに二個の屈曲を以てせしめ、皮下結締組織と筋鞘との間に地平に刺入し之を切斷して第八日目に至り剖檢するに、鍼の周圍に炎

症の徴候を現せり。即ち毛細管は怒張し靜脈鬱血・漿液滲漏を發し、一の屈曲より第二の屈曲間に結締組織密に纏絡して容易に之を拔く能はず、之に由りて是を考ふるに少しく時間を經過せば全く包裹して他の組織と隔離するに至るべし。

今此三種の試驗の結果に由り之を結論するに、鍼尖の鋭鈍と運動の繁簡に從つて其趣きを異にするに似たり、鍼尖の鋭利にして刺入局部の運動劇しき部位は速に移轉し去りて跡を留めず、其鈍にして且つ運動緩慢なる部位は經年の久しきに至らば酸化溶解して形を滅せり、又移轉せず消滅せざるものは結締組織新生し之を包裹して宿痾を殘さゞるものゝ如し。之を要するに此三種の試驗の結果皆敢て害なきものとす。然れども折鍼の身體に於ける其關係甚だ大なるを以て今一二の試驗を以て速に其害否を斷ずる事能はず云々。

又三浦醫學博士は「モルモット」の腹腔内に銀鍼六番を三糎刺して切斷し、他の一本は臀筋に刺折し八箇月の後剖檢せしに、大久保氏の説と同じく刺折部に鍼は存在せず、因りて精密に各部の臟器及び筋肉を檢したるも遂に發見せず、是れ腸の蠕動により身體を脱出せしか或は酸化消耗したるものなるか未だ知るべからず、又折鍼後三週間は紫色を呈し炎症の徴著明にして細胞浸潤ありたるも、聊かも化膿の傾向なく爾來動物は運動並に飲食をなし、又交尾に障碍なかりしと。

又我が關西鍼灸學院に於ても曾て前後四回に亘りて家兎に就き折鍼の試驗を試みたるに、孰れも大久保氏の報告と同樣之が爲めに後害を遺すの證憑を擧げ得ざりき、即ち第一回は成育せる雄

兎の腰椎左側に五番鍼を一寸餘折鍼し、一週間後、講師水野醫學博士と共に剖見したる所、鍼身の所在判明せず、從つて猶ほ腹部內臟にまでも解剖を進めたるにも拘らず其痕跡を認めず、勿論刺鍼せし局部にも何等組織的の變化を認めざりき。第二回も同じく雄兎に腰椎鍼を施し五番鍼一寸五分を折斷し置き二ヶ月の後同じく水野講師執刀の下に局部を寸斷したる所、刺折側の腰椎橫突起前側に至りて縱經に鍼身の潛在せるを發見したるが、其近傍組織に於て毫も炎症性の變化もなく、讒に鍼身の曇れる色に變ぜるを睹たるのみ。第三回は雌兎の成育せる者に同じく前同樣の腰部鍼を試み、一寸餘折鍼して約一ヶ月半にして今度は講師糸井醫學士の執刀にて剖見したる所、直刺したるにも拘らず鍼身は下方に移動して臀部の筋に移行存在せるを認め、該局部に少しく充血の徵あるを知りたるも爲めに運動其他に別に障害ありとも認め得ざりき。第四回は成育せる雄兎の左後脚大腿部の外表に一寸六分鍼を一寸五分許り上方より下方に斜めに皮下鍼を行ひ、龍頭の附着せし儘上部より堅く繃帶を纏ひ置きて八日の後、該繃帶を除去したる所、不思議にも鍼身は弓形に彎曲して脫出し、刺痕部の何れなるかも知る能はざりし。之に由て是を觀れば固より切斷されし鍼身は運動に際し、多少其位置を移動縫行する事は明かなるも之が爲めに組織的變化を認めざるは勿論、以上の四例にては孰れも深く腹部內臟に向つて移行するの傾向は無きが如し。

之を要するに動物試驗の成績は以上の如しと雖も人體は他の動物に異なり其器官貴要なるを以て直ちに比較すること能はず尙ほ諸多の方面より實驗研究を遂げ、其結果を綜合して之を結論すべきものとす。

灸術の定義及解釋　灸術とは病氣に應じて一定の經穴又は皮膚の定點に灼灸すべく指示し、又は其部位に艾を點じて焦灼する施術を云ふ（內務省衛生局）

所謂灸術は直接又は間接に艾を皮膚に貼り之を灼き、因て皮膚に火傷を生ぜしめ若くは單に身體に溫熱を與へ以て疾病を治療するの術を指稱す（大審院判決例）

第二　灸治學

灸治は何れの時代より始まりしや明かならずと雖も、支那にては伏羲の時代より始まり、本邦には支那より鍼術と共に輸入されしものにして、欽明天皇の朝には典藥寮を置きて之に鍼科・灸科の術も專門的に設けられありしと云ふ、歐洲には十七世紀の末に傳へられ、佛蘭西のジヤン・クラーゼが著せし「日本西教史」（西暦一六八九年紀元二三四九年）に、我國の天正年間前後の風俗を記せし條下に醫道の狀況を叙し、大病には病者の皮膚の二十個所以上に灸することを記せり、又延寶元年（紀元二三三年）に來朝せし和蘭のリンネ、翌年來朝せしブスホーフ、其他ビショップ（紀元二三四年）及元祿二年（紀元二三四九年）來朝せし獨逸の醫師ケンフエル等は其著書中に灸法の事を記述し、もぐさ療法のあることを廣く歐洲に傳へ、其後シーボルトは石坂宗哲の著書を譯して之を傳へ、以て治療に應用せらるゝところありしも、其始祖たる支那及印度に於けると共に爾後之が研究を繼續啓發するものあらざりしがために、自然に消滅するの運命に陷れり、本邦に於ては永祿年間（正親町帝時代にして紀元二二三四年）には吉田意休、元和の頃（後水尾帝時代にて紀元二二八〇年）杉山和一出で、元祿年間（東山帝時代にして紀元二三五〇年頃）には岡本一抱、續て後藤艮山・香川修庵、大に鍼灸術を鼓吹するに至り、上下の間に偉大なる信用と勢力を保全し、且つ民間療法としても地方に依りては生後一ケ年內には必らず灸すると云ふが如き根强き信用と習慣とを持續せり、其後西洋醫學の進步勃興せし以來、其治術の妙に眩惑せられ、東洋醫術の自然消滅に隨伴して其光芒を收め、民間療法に墮しつゝ辛ふ

ケンフエルは御園意齋の術を傳ふ

吉田意休は吉田流の鍼醫、出雲の人、刺鍼家鑑等の著あり

杉山和一は前編に出づ

岡本一抱は近松門左衛門の弟、醫家にして阿是要訣、經穴密語集、鍼法口訣指南等の著あり、元祿時代（二三六〇年頃）の人

後藤艮山は醫家にして名は達、字は有成江戸の人、古方醫の開祖、醫の骨形を改めて束髪し醫風を正くす、著はす所熊膽蒂椒灸說の數編あり、享保十二年（一二三八七年）年七十五にして歿す

香川修庵は醫家にして名は修德、字は太仲、古道を修め大に名あり著はす所藥選醫事約說、灸點圖解等あり寶曆五年（一四一五年）二月年七十三にして歿す

じて其餘命を保つの悲運に陷りしと雖も、尙ほ世人の信用を失はずして長く潛勢力を有せる所以は灸療上、今日の進步せる醫術に比較して少くも之が追及し得ざる價値を實驗し確認せる結果に他ならず、宜なり現代醫術は科學的に完膚なき研究を遂げたるが如しと雖も、多くの場合は診斷方法の發達に止まり、治療術に於ては未だ世人の翹望するが如き完全なる奏効を見ること多からざるを以て、治方は更に遡りて再び東洋醫術を吟味するものあるに至り、それと同時に灸療も亦學術的に研瑳せられたる斯業家の努力に依て再び舊來の信用を恢復し、其治効を稱讃せられ、或る疾病の治療に對しては寧ろ現代醫學に求む能はざる確實性を有することを認められたる結果、諸多學者の注目する所となり、之が闡明に關する數多の業績相踵で出で、漸次治療界に地步を占むるに至れり、吾人は恒に思ふに斯業家たる者、須らく時代の趨勢に顧み、最早宗教的信仰と結托するが如き、或は無教育なる蒙昧の徒に迷信的感想を起さしむるが如き所業を排斥し、學術上の根據を以て之を研究應用するに到らば其進步發達と共に益世の信用を高め以て理學的療法の一に列せしむること決して難きにあらざるべし。

第一章　灸の種類及方法

灸治は本邦にては平安朝時代（紀元一〇〇年頃）より多く行はれたるものにして、鎌倉時代（紀元一五四五年頃）室町時代（紀元二一〇〇年頃）に至るまで主に癰疽・疔・癤・瘰癧・矢創・刀創等、瘡瘍を治するに用ひられたり、是れ創瘍に直接に施灸せば出血を止め且つ創傷部の組織を燒灼し防腐作用を起し又化膿の豫防ともなり、畢竟創面の治癒期を促進せしむるものと

灸、和名やひ（也比）灼火（ヤクヒ）の畧言（やいと）とは灸所の義なりといふ

せられたり、又紀藩醫員の武部子藝氏は「發泡打膿考」を著はし、其書中に發泡打膿の法は藥力に依りて其部分に運動の機轉を施し諸官の閉塞を開發するものにして其術は從來常用する處の艾灸にて膿を釀すを良とすと記せり。

「ヨコネガヘシ」・「ウチヌキ」等の灸治は全く打膿術なりとあるが如く多く外科醫療中にも用ひたれども、中古に至り專ら內科的醫術に應用せられ現代醫學の進步發展其停まる處を知らざるの間に在りて尙ほ此灸治は僚屬の一として盛んに現時に於て一般に賞用せらる。

今其種類を大別すれば艾灸に在りては有瘢痕灸治及び無瘢痕灸治の別あり。其他水灸・墨灸・漆灸等の類ありと雖も民間に用ひらるるは多く有瘢痕灸なりとす。

(一)有瘢痕灸治(艾灸)　とは艾葉を通常は圓錐形に麥粒大の大さに指頭を以て捻りて艾炷となし、之を皮膚上に墨汁を以て定めたる灸點部に置き線香の火を貼し燃燒して溫熱を與へ、之に由りて皮膚面に一の火傷をなさしめ、此部の皮膚は爲めに乾燥し黑色となりて痂皮を結び壞死に陷り以て瘢痕を殘存せしむる處の普通に行はるゝ方法を云ふものにして、自然化膿せし場合は其瘢痕は稍や大となるべし。

(二)無瘢痕灸治　とは其種類一定せず、或は柄杓或は火熨斗の如き或は圓筒狀の形狀を爲せる金屬製とし、底面は脫脂綿又は「ガーゼ」を以て包み之に食鹽を浸し此器中に艾を入れ之を燃燒して使用せるものあり、或は押灸と稱し厚き紙袋に艾を詰め込み懷爐灰の如き形狀とし此一方を燃燒して紙又は脫脂綿若くば布片を隔

てて間接に高低の溫熱を自在に皮膚に與ふるの方法あり或は鹽灸と稱し食鹽を濡れ紙に包み其の上に多量の艾を置き之に點火するの法あり。或は味噌灸と名け味噌の一塊を薄く伸ばして皮膚上に置き其上に艾を置きて燃燒する方法等の療法にして一名溫め灸と稱し均しく艾葉を使用し皮膚に火傷するが如き瘢痕を遺留せざるものを云ふ。

(三)水灸　とは一は龍腦一匁、酒精適宜、薄荷腦二匁の三品又は礪砂精一匁、白礬一匁、樟腦二匁の三品を何れも混和溶解せしめ、之を筆軸又は細棒を以て手術點に塗布するものにして、一は濕したる日本紙を數枚重ねて皮膚上に置き其上に艾を薄く平に展べ之に點火して緩和なる溫刺戟を皮膚に與ふるの方法を云ふ。

(四)墨灸　とは黃柏五匁に水一合を入れ緩火を以て五勺に煎じ詰め此汁を以て和墨を摺りて濃液となりたるを度とし、此液汁中へ麝墨一匁、龍腦二匁、米の粉二匁を混じ能く攪拌して之を筆軸にて手術點に塗附し、或は麝香一匁、煤煙適宜「ヒマシ」油適宜、龍腦一匁を能く混和調製して艾に浸潤せしめ之を小豆大に丸めて手術點に置き其上に艾灸を點ずる方法を云ふ。

(五)漆灸　とは生漆十滴「ヒマシ」油適宜、樟腦油十滴を能く混和し晒艾に含ましめて恰かも肉池の如き程度に製し或は黃柏の煎汁中へ乾漆十匁、明礬十匁、樟腦五匁を粉末とし之を混和して黃柏の煎汁にて適宜の艾に浸潤せしめ、兩者共に之を小さき箸の如きものの先にて手術點に塗附するの方法を云ふ。

漆灸は人により漆負又は漆感と稱へ漆の毒に感じ施灸後甚だしく發熱し全身の皮膚赤色となることあり常に注意せざれば不測の失敗を招くことあるべし。

第二章　艾葉

此事「本朝醫談」に載す

艾は和名與毛木、俗に毛久左、別名冰臺、蘆草、艾蒿、黃草

艾葉 Moxa は始め葡萄牙より輸入せられしものゝ如く傳へられ、天正四年(紀元二二三六年)織田信長、安土に城を築きし時、葡萄牙人イルマン・パテレン氏等を招き、彼等に江州伊吹山に五十町の地を與へられ藥草を植ゑしめしに、艾葉は其中の一種なりしと云ふ。艾葉の起源を江州伊吹山と一般に稱へらるゝも、こは誤傳にして實は依然支那より傳はりたるものにして、支那には灸治は早くより存在し既に「素問」にも灸治の事を說き、「素靈」以後「千金方」・「外臺秘要」等にも灸治に就て論ぜり。而して我國に於ては支那より傳來せる事は沿革史に既記の如く夙に古代より用ひられたるものにして、藤原實方朝臣「かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思

さしも草の「さす」は灸をすゑる事なりといへる山崎美成の說と差燃草の義で差は頭辭なりとの說あり

是は能因の「坤元儀」にての說なり

ひを」又和泉式部「けふもまたかくや伊吹のさしも草さらば我れのみ燃えや渡らむ」又古歌に「あぢきなや伊吹の山のさしも草おのが思ひに身をこがしつゝ」等あるに見るも平安朝時代より在りしことを認めらるべし、而して近時に至り近江國の伊吹山に艾葉を栽培し弘く世に販賣さるゝに至り普く世に江州伊吹山の艾葉として膾炙さるゝも、爰に往古に稱へられし伊吹山の艾葉は下野國都賀郡標茅原に於て產せるものを指せるものにして下記の古歌に據るも明かなり「下野やしめしが原のさしも草おのが思ひに身をや燃くらむ」(六帖)「しもつけやしめぢが原の草かくれさしもはなしにもゆる思ひぞ」(夫木集)又淸少納言の「枕草紙」にも「まことや下野へ下ると云ひける人に」と題せる歌に「思ひだにかゝらぬ山のさしも草誰かいふきの里はつけしぞ」とあり、而して艾葉は素と山野に自

生せるものなるが近世艾葉の需要益々增加するに從ひ北陸其他に於て之が栽培を業とする者あるに至れり。

八隅景山著「養生一言草」に出づ

灸療の燃料に使用せらるゝ艾葉は、植物學上、菊科に屬する「ヨモギ」Artemisia vulgaris var. indicaにして、春日新芽を發生し、葉の表面は青く裏面は白くして白色の毛茸を有し、夏秋の候に到れば淡褐色の小頭狀の花を開き、俗間之を蓬と稱へ食用に供す、蓬を以て草餅を製することは雄略天皇(紀元一一三〇年頃)より始まり、蓬は百草の司なるを以て百病を治すといひ「國民のよろづの病のぞかんと蓬の餅を祝ひ初めてき」といへる歌などあり、藥用としては煎劑として吐血・下血及び婦人の漏血等を止め、又搗汁を服するときは蚘蟲(蛔蟲)を殺すと「本草綱目」に載せたり、之より製せるものを和訓にては「もぐさ」と稱し燃草の義なりといふ、此の葉を乾燥して能く木杵にて搗き其纖維を拔き之を日光に晒し毛茸を集めて灰白色の綿の如く精製したるものなり。伊吹に產する「ヨモギ」には二種ありて一を雌、一を雄と呼び、甲は高さ長じて約一・五米、葉は細く裏面に毛茸多く乙は高さ殆ど同じけれども葉は前者よりは大にして强剛且裏面の毛茸少なし、思ふに雌は伊吹「ヨモギ」又「オホヨモギ」Artemisia vulgaris L. var. vulgatissimaにして、雄は「ヤマヨモギ」Artemisia vulga-

第十圖

iis を云ひ、雌よりの製品は膨軟・緻密にして質良に、火付宜しく、雄よりのものは之に反す、是れ其葉裏の毛茸の多寡に關するものならむ。而して灸治專門家の日常使用する艾葉は古くして能く乾き能く晒して色の白き程良品とせり。是れ古きものは火勢溫く冬日の如くなるも、新鮮なるものにして乾燥稍鈍きものは火勢猛烈夏日の如きが故に一般之を排斥す。昔孟子も七年の病に三年の艾を求めたりと云へり、而して艾葉の種類に散艾及び切艾の別あり。斯業家に在りては普通散艾を專用すると雖も、民間に於ては使用し易き關係上、多くは切艾を用ひ居るが如し。

小野蘭山氏の「本草譯說」に艾は「よもぎ」・「よごみ」・「さしもぐさ」・「紅毛」・「あるとみしや」等といひ又肛裏・屏風・病草・羊茸・女麴と云へり。或人之を分析したるに艾屬の植物には芳香性の苦味質若干を含む、之を

小野蘭山は本草學の大家、著書頗る多し文政十三年（一八四九〇年）死

「アヒルレイン」と云ふ。其他二種の苦味ある揮發油あり。之を「イウアイン」及び「モスカチン」と名け共に帶黃綠色の油にして芳香を放ち薄荷に似たる味ありて其原素は酸素一容・水素二十容・炭素十二容より生成せることを知れり。又大橋氏の實驗に依れば、艾葉の浸出液の大量を家兎に徑口的に與ふるときは中樞神經痲痺及び循環器障害を來し斃死し、其致死量の四分の一を健康家兎に與ふるも何等の變化なきも、溫刺せる家兎に與ふる時は體溫著しく下降するを認め、以て艾葉には下熱作用を有する一種の物質を含有すと云へり。而して之を分拆するに唯少量の「クロルカリユーム」を得るも、之のみを以て下熱作用ありと認むる能はず、尙ほ進むで之が分析を試みたる結果、鞣酸と同一性狀の物質を得たりと云ふ。

陸佃云ふ醫の文灸一灼を用ふる之を一壯といふ、人を壯にするを以て名とす、又灸草一灼之を一壯といふ、壯人を以て法と爲す也とあり

第三章　灸の壯數及び大小

灸の壯數及び大小は刺鍼に深淺及び刺戟の度あると同じく各病症又は體質の强弱・肥瘦并に榮養の良否を考へ且つ年齢・幼老に從つて其壯數・大小を斟酌せざるべからず、若し大小を誤り其度宜しきを得ず、猥りに壯數を重ね同一部位の刺戟を持重するが如き事あらば鍼に於けるが如く遂に神經纖維は其傳導作用を減弱し施術亦其効尠からしむのみならず、却つて危害を釀すこと又無きに非るべし。

「明堂灸經」に灸炷三分ならざれば火氣、兪穴に達する能はずして病癒えずと云へり、然れども中年及び小兒又は虛弱なるものにありては其大小・壯數を斟酌せざれば火熱に堪へ難く、或は疲勞を覺

山下學士の論文題は下に出づ

ゆることあり、故に壯數は體質・疾病・年齢に依つて定めざるべからざるが、普通の場合は壯數は十歳前後の小兒に於ては五壯乃至十壯、大人にては七壯乃至二十壯位を以て適當とす。而して灸炷の大さは打膿を目的とせざる場合は鼠糞・麥粒より大とし、大と雖も小豆の大さとすべく、場合に依りては灸炷を小となし、代ふるに壯數の增加を以てすべし。殊に近時に至り灸の分量(Dose)即ち壯數の甚だ重要なることを證明するに足るべき實驗的研究成績を出せり。例之ば原博士が其實驗成績により結核患者に應用して有効に作用せしむるも、無効に終らしむるも亦却て有害ならしむるも一に分量の取捨にありとし、病症・體質・經過を參酌して大人は十點內外、各點七壯づゝ毎日一回灼くを基點とすべきを唱ふるが如く、又山下學士の實驗に依るも家兎に對する艾量〇・一瓦の場合に白血

「養生訓」は貝原益軒の著、此他大和本草等著書百餘種あり、正徳四年（一三七〇年）死

球數の增加並に機能の增强最も盛にして其前後の分量にては却て低減するを見たるが如き是なり。

顏面・頸部の如き總て外表に現はるゝ部位に有瘢痕灸を施して瘢痕を遺留し、或は施灸部より化膿菌侵入し化膿するが如きことあらば、人類間に於ける所謂自然の美を失はしむる嫌あるを以て婦人の如き往々之を嫌忌す。故に之等の部位は寧ろ艾灸を避け代ふるに鍼術又は無瘢痕灸治を以てすべし。又「養生訓」には瘦せて虛怯なる人灸の初め熱痛をこらへがたきには艾炷の下に鹽水を多く附け、或は鹽のりを附けて五七壯灸し、其後常の如くすべし此の如くすれば怺へ易し、猶もこらへがたきは初め五六壯は艾を早く去るべし。如此すれば後の灸こらへ易し、又灸炷をこらへ難き人には切艾を用ふべし。紙を幅一寸八分ばかりに縱に切りて艾を重さ各三分に秤にかけて長くのべ、右の紙にて卷き、其はしを糊にてつけ日にほし、一炷ごとに長さ各三分に切りて、一方は直に、一方は片削にし、直なる方の下に厚き紙を切りてつけ、日にほして灸炷とし、灸する時鹽糊を其下に附けて灸すれば熱痛甚しからずしてこらへ易し、灸炷の下に糊を附くるに艾の下には附けず、まはりの紙の切口に附くべし。艾の下に糊をつくれば火は下まで燃えず、此切艾は俄に熱痛甚しからずして、ひねり艾よりもこらへやすし、然れども、ひねり艾より熱することと久しく、消ゆること遲し、底に徹すべしと記載せり。

打膿灸とは五厘乃至一錢銅貨大の點灸をなし、施灸後、吸出膏を貼用して殊更に化膿せしめ膿汁を排泄し病毒を排除するを目的とするものゝ如し。

岡本一抱は諸書に擧ぐる所の奇輸の最も要なる者を擇みて鍼灸阿是要穴を著はせり

第四章　施灸の部位及目的

灸を施すべき部位は鍼治に於けるが如く身體部分の隨所に行ふべきものにあらずして、其疾病に對する有効なる體部に施さゞるべからず、之を經穴と稱し取穴法によりて之に點ずるを常とし又往々學理に基きて自ら之を選むことなきにしもあらず。古來阿是の穴と稱し、病ある時、其上を揑しめ若し裏其處に當らば孔穴を問はず、即ち病を成すところを快ならしむるを得と「千金方」に載するが如く古人既に之を唱へたり。

而して治療の目的には先づ左の如き手段を考慮せざるべからず。

(一)誘導法　とは患部より隔たりたる部位に施灸し、其末梢神經を刺戟し以て其部に誘導するの法にして例之ば充血性頭痛に對して肩部・背部或は四肢の末梢に施灸し此部の毛細血管を擴張せしめて腦の血量を減少せしむるが如く、或は子宮機能の亢進に因る疼痛に對して腰部或は下肢末梢部に施灸し此部の血管を擴張せしめて下腹動脈に異狀を起さしむるが如く、或は深部の充血・炎症に對し其近傍に施灸し表在毛細管を擴張して恰かも醫療に於て種々なる發泡膏を貼用し、或は芥子泥療法を用ゆると其理を同じくするものゝ如し。

(二)直接刺戟　とは疾患ある局部に施灸するの法にして其部の知覺神經枝に刺戟を與ふれば刺すが如く衝くが如き疼痛を感じ求心性により中樞に傳達し、中樞細胞は爲めに興奮を起して更に反射的遠心性により末梢に向つて傳搬し以て局部の血管著しく

擴張すべし。從つて血液の灌漑旺盛し、組織の新陳代謝盛となるを以て浮腫及び炎症性疾患に對しては滲出物の吸收を強め、疼痛・麻痺・知覺異狀・鈍麻せるものゝ如き其神經變常せるものを正復せしむるを云ふ。

(三)反射作用　とは直接患部に刺戟を與ふる能はざる、即ち內臟疾患の如き、或は深在神經の如きに對し解剖的器官の配置を考へ其中樞又は患部に偏せる處に施灸して間接に刺戟を與ふるの法にして、例之ば胃の消化作用減衰せるに對し、第六乃至第十一背椎神經を刺戟し、或は坐骨神經痛に對し第五腰椎神經及び薦骨神經或は脛骨神經(三陰交)深腓骨神經(三里)等の知覺神經枝を刺戟し、求心性により運動神經枝に刺戟を傳達し反射的に遠心性作用を惹起して其神經變狀を整調せしむるが如きを云ふ。

第五章　灸點の取穴法

灸を點ずる部位即ち孔穴(又兪穴)を定むるに刺鍼點の取穴法と均しく古來凡て經穴に依りたるものなるは前條「刺鍼點」の項に於て仔細に記述する處の如し。之に由りて是を用ゆるも其理を推究する能はざるにより唯だ學者をして徒らに煩悶せしむること多きのみ。故に著者は刺鍼點を定めたると同じく猥りに經穴のみ墨守せず、灸點の取穴法も又解剖學に基づき骨・筋・內臟等の位置・形狀及び血管・神經分佈の狀態并に中樞部の位置・末梢神經の裝置、其他諸臟器等の關係を經とし生理學上の作用を緯となし以て其依る處の理を詳かに究め以て取穴するの方法としぬ。然れども現在點灸するに依然經穴を主とする部位又尠なしとせず、寧ろ多く之に

準據しつゝあり、且つ其効驗に至つても經穴の部位に由つて驚くべき處あり、是れ著者の猥りに之を放棄し排斥せざる所以なり。されど經穴のみに由りて取穴の標準并に治病の理を明らかにする能はざれば、之を筆にし、之を口にして其理由を理解亦說明し能はざるの憾みあり、故に經穴をして解剖・生理學に對照して其理を推究せば新舊の兩說相一致し理論又明確にするを得べく以て之を實地に應用するに至らば其得る處蓋し尠からざるべし。是れ所謂溫故知新の謂なり。學者須らく能く古書を涉獵參照すべし。

古書に曰く灸を點ずるときは體位を正直して即ち正座して點せば灸炷の時も正座すべし、又立ちて點せば灸炷の時も立ちてすべし。妄に點じ且つ灸炷せば體位の如何に由て筋に緊張し或は收縮するに由て採點部位に異動を生じて正穴に中らずとか、又注意すべき事に屬す。

第六章　取穴の寸法

古昔より經穴・兪穴の位置を示すには身體表面に現はれたる骨の隆起又は筋溝、或は脈搏の手に應ずる個所等を標準とし、夫より上方又は下方へ何寸何分と稱するを常とすれども、其寸法の尺度甚だ不定にして各家の各書に依りて其據る所を異にせる爲め、唯だ何寸何分と聞くのみにては如何なる尺度にて測りしや不明なるを以て其用を爲さず、頗る錯雜なり。故に原南陽も其著「經穴彙解」に於て「凡そ兪穴を取る折量分寸の法を說く者一ならず、其專ら同身寸を主として靈樞の骨度篇に據らざる故に從つて多く參差を爲すべし」と說けるが如く、崔知悌は凡そ孔穴の尺寸皆人形の大小

に隨ひ須らく男は左、女は右とし手の中指の一節兩紋の中心を量り一寸と爲すべしと云ひ、孫眞人は、凡そ孔穴は皆人形の大小に隨ひ手の中指の第一節を取り一寸と爲すと稱し、又徐鳳は大指と中指とを相屈して環の如くし中指中節横紋の上下相去る長短を取つて一寸と爲し之を同身寸法と謂ふと曰ひ、孫思邈の如きは手の大拇指第一節を取つて横に度り一寸と爲すと唱ふる等、其尺寸の標準甚だ多岐なり。然れども古來より經穴の寸度としては「靈樞」に載する所の骨度扁なるものが最も多く使用されしものゝ如く、今其寸法を擧ぐれば左の如し。

身長七尺五寸（一寸は患者の中指中節の縱經とせり）・頭蓋の周圍（前は眉弓より後は後頭結節に至る）二尺六寸・胸部の周圍（乳の周圍に於て）四尺五寸・兩乳の間八寸・胸骨上緣より劍に至る長さ九寸・劍尖より臍に至る長さ八寸・臍より耻骨軟骨接合緣に至る長さ六寸五分・脊骨より尾骶に至る（脊骨とは第一胸椎を指し尾骶とは尾閭骨の如し）長さ三尺・肩端より肘尖に至る（肩髃より尺骨鷲嘴突起を云ふ）長さ一尺七寸・肘尖より腕横紋に至る長さ一尺二寸五分・腕横紋より中指爪端に至る長さ八寸五分・耻骨上廉より膝蓋骨內上廉に至る（耻骨軟骨接合の上緣より內上髁に至るを云ふ）長さ一尺八寸・膝蓋骨上廉より內髁の下廉に至る（內上髁より下腿內髁に至るを云ふ）長さ一尺五寸一分。

第十一圖
手の中指を度りて一寸と爲すの取方

第十二圖
手の拇指第一節を横に度りて一寸と爲すの取方

然りと雖も此寸法も曲尺又は鯨尺に準ぜしものにもなかるべく兎に角餘りに長きに失して現今の人には應用し難きものなるを以て本書後編に載する所の經穴學に於ける寸法は現代の普通成人を標準とし曲尺を以て其寸度を示し以て實地の應用に便したり。

第七章　灸治の忌日

灸治を施すに就ては俗間に於て種々なる忌日を傳へられ「養生辨」に我が歳の日と巳の日とは身を燒くと云ひて點ぜぬものと云ふ。身を燒くが嫌へば巳の年の者は一生灸はならぬ筈なり、夫では差支ふるゆへ巳の年の者は一代構ひなし云々とあり。

又卯腹・辰腿・寅背・未頭・申腰或は子日・丑腰・寅胸・卯脾・鼻・辰腰膝中・巳手・午心・未頭、手・申頭、背・酉背・戌頭、面・亥頭、頂との說を稱ふるものあり。

有名なる小說家、嘉永元年（一二五〇八年）死

曲亭馬琴翁曰く灸治は曆から先きへとり出し年日じやの血忌じやのと、卯の日には氣海・天樞を据ゑず、寅の日には七九を燒かず、卯腹・辰股・寅背とは畫を書く人の云ふことさうなに灸治に忌むは大きな間違ひ、良藥は口に苦いもの故に病を癒し、直言は氣にあたるもの故に身の爲めになるを知らば療治に日を撰む感はあらむ。「年日と云ふは毎年其月の我が生れたる日に當るを誕生日とも又略して年日とも云ふなるべし」然るに子の年に生れて子の日を忌むは年と月とを勘定に入れぬ算盤ちがひにて据ゑともなさの手前勝手、よしや治療に日を撰んでも病の發りさめは日を撰ばねば元日でも年日でも頓病・頓死を見ては居られず、然らば日を撰ばずして醫を撰み、時を忌ずして毒を忌み、病の發らぬ時にすゆる養生

後醍醐帝に傳たりし人

の灸治ならば日にも時にも斟酌なく天よく晴れて溫なる日に艾を撰み火を清くし穴處の違はぬ樣に點をおろせて灸治すべし云々「金烏玉兎集」に血忌日は一切有情の命を絶たず鍼灸すべからずと云へり「血忌日とは丑正月。未二月。寅三月。申四月。卯五月。酉六月。辰七月。戌八月。巳九月。亥十月。午十一月。子十二月を云ふなり」註に曰く血忌日は天の善星會して惡鬼を退治したる日なり、故に諸人血を出せば彼の惡鬼の血と雜合して殃災を受くると云へり凡て血を出すを恐れる日ならば吸玉・鈹鍼などにて血を取ることは惡けれども今艾にて點ずる灸のみは忌むは心得難し云々。

又神事に灸を忌むや不忌やの事は吉田大納言定房の日記又は兼實公の玉葉にもあり、神事に之を忌むは陰陽家の說にて「火剋金」と夏(火)から秋(金)に遷る時であるゆへ之を忌むと云へるなり。

貝原益軒曰く方術の書に禁灸の日多し、其日其穴を忌むといふ道理、分明ならず、內經に鍼灸の事を多く云へども、禁鍼・禁灸の日をあらはさず、「鍼灸聚英」に、人神尻神の說、後世術家の言なり、「素問難經」に言はざる所、何ぞ信ずるに足らんやといへり、又曰く諸の禁忌たゞ四季の忌む所、素問に合ふに似たり、春は左の脇、夏は右の脇、秋は臍、冬は腰是なり、聚英に言ふ所かくの如し、まことに禁忌の日多き事信じがたし、今の人、只血忌日と、男子の除の日、女子は破の日を忌む、是亦いまだ信ずべからずといへども暫らく舊說と時俗に從ふのみ、凡術者の言、遂一に信じがたしと。

上序記する處に由て考ふるも科學的何等の深き根據あるなく殆んど俗間に稱へたるに過ぎざるが如くして素より泰西醫學上より攻究する價値なきが如きを以て敢て忌まざるべからざる事

なきが如し。

第八章　灸の溫度

灸術は艾葉を灸炷として燃燒するものなるが故に其發する溫度並に其深達作用に就ては灸の治効上、之を知るの要あり、今其實驗成績を摘要すれば左の如し。

一　灸炷の發する溫度

醫學士樫田十次郎・醫學博士原田重雄の兩氏が東京帝國大學醫學部に於て實驗せる所に依れば、石綿板上に電溫計の金屬線の接合部を置き其上に雞卵大(凡そ四瓦)の艾を燃燒したるに、第一回は五百七十度、第二回は五百六十度を示せり、又艾の燃熱せる溫度は

樫田、原田共著　灸治に就て　東京醫學會雜誌第二十六卷（明治四十五年）

駒井博士述　灸治の實驗的研究と共學說に就て　實踐醫理學第一年第六號、第二年第一、二、三號

水銀槽部の周圍に於て攝氏の三百六十度以上の熱度を有し、且つ肉片を三十七度に溫め其上に電溫計の金屬接合部を置き、巨大艾炷を其直上にて燃燒したるに前後四回の平均溫度は二百九十度なり。

又家兎の腹部の毛を剃りて其部に艾灸して寒暖計にて計るときは平均巨大艾にて二百度、大切艾にて九十三度五分、中切艾にて八十二度五分、小切艾にて六十二度五分、小切艾にて六十一度なりき、而して生物に在りては其溫度比較的低きは之れ血液が絕へず溫を奪ひ去るが爲めなるべし。

醫學博士駒井一雄氏は上記樫田・原田兩氏の前記灸炷の發する溫度の實驗が艾の量的數字不明なるがために之が燃燒の際、身體的影響を檢する場合に甚だ正確を期し難きを遺憾とし、京都府立

醫科大學生理學教室にて實驗の結果は艾炷の重量〇・〇五瓦のものを家兎の剃毛皮膚上に燃燒せしむるときは皮下組織内にて攝氏四十五度强を示し、四壯にて約四十九度、七壯にて五十三度を示せり、又同方法の場合に腹腔内に檢溫器を挿入して測定するに皮下結締織に於けるよりは影響を受くること少なく、卽ち一壯の際は四十度を示し、七壯にして四十四度を示し、孰れも壯數を重ぬるに從ひ累進的に溫度の上昇することを認めたり。

此の實驗に基くときは壯數を增すと共に益々皮下並に腹腔の溫度を上昇せしむることは明かにして且つ艾炷の重量を增すときは一層溫度を上昇するものなることを推定し得べく、畢竟、灸に由て身體に受くる溫度は艾炷の品質及び大小・壯數に依て左右せらるゝものたるを知るべし。然れども亦醫學博士後藤道雄氏の說に依れば、神經の熱感受性は攝氏四十五度を最高限とするが故に夫れ以上の高溫を作用するも、結局は四十五度の溫を作用せしむる影響と大差なし、從て激痛を忍びて醜瘢痕を生ぜしむるの要なく、他の熱療方法を使用するも同樣の効果あるべしと云へり。

二　各種灸炷の皮下深部に及ぼす熱の深さ

各種艾炷は皮下組織の溫度に向つて如何なる影響を生ずべきかは溫熱療法としての灸治に必要なり。樫田・原田兩氏の實驗に依れば、屍體の皮膚組織中に小なる孔を穿ち、鋭敏なる寒暖計を皮膚の表面と平行に皮下に挿入し、其水銀槽部に當る皮膚の直上に灸を施し、溫度の變化に就きて檢し、次で同方法を家兎(生體)の大腿内側・背部第七胸椎の右側等に於て前後九回の實驗を行ひ、其結果を

總括するに、最も普通に行はるゝ切艾は發する所の熱量少なく且つ熱を與ふる時間短きを以て皮下深所に及ぼす熱の影響は極めて僅少にして○・四糎の屍體皮膚下に在る寒暖計に一度以下の影響を及ぼすに過ぎず、之に反し巨大艾炷は加熱の時間短く且つ熱量多きを以て遙かに強き深達作用を有し、家兎の皮下○・四糎に於ては二八・七度に寒暖計を上昇せしめ、二糎の深部に於ても尚ほ一・一度の上昇を見、且つ二・三糎の深さに於ても○・五度以下の上昇にして、二・七糎近くの深さまで熱の影響するを知り得たり、故に施灸に依り強き熱の深達作用を欲せば大なる艾炷を用ゆるか、或は灸點の數を增し、回數を頻回連續せざるべからず。

第九章　施灸部皮膚の變化

一　施灸部皮膚の肉眼的變化

灸治を施したる局部の皮膚は火傷を生ずべし、始め赤色を呈し後ち皮膚乾燥して黑色となり且つ少しく隆起し、然る後ち痂皮を作り數日後にして痂皮剝脫し瘢痕を遺す、然れども時に水泡を起すことあり、是れ溫度の關係に由るものにして、即ち其火熱弱き時(四十五度)は只其部に一過性の充血を致すに過ぎざれども、稍強き時(五十度)に在りては水泡を發生し、尙ほ強き場合(五十五度)は壞死に陷り、一層強烈(六十度)なれば其壞死は深部に及ぶべく、而して此瘢痕は初め赤褐色を呈すれども、時日の經過するに從ひて漸次灰白色或は白色斑に變ず。

樫田氏等の記載に依れば施灸部の表皮は固有の構造を失ひ單

に平滑なる表面を呈して被覆するに止まり、乳頭・毛嚢・汗腺の排泄管・知覺神經末梢の一部等は一時悉く破壞せられて消失し、爲めに皮膚の厚さは減少し且つ知覺鈍麻或は知覺脫出すべし、而して麻痺したる該局部は時日を經過すれば再び神經纖維を再生して知覺を恢復するに至る、されば灸痕部に施鍼するときは皮膚の瘢痕組織のために彈力殆んど消失せるを以て、鍼の刺入極めて固く且つ著しく疼痛を感ずべし、又施灸部に不潔なる膏藥を數日貼用せば、中に膿汁及び壞死性物質を充實し且つ筋層をも侵して局部の皮膚潰瘍を生ず。

二　施灸部皮膚の組織學的變化

施灸に依る皮膚の組織學的變化に就て醫學博士原志免太郎氏

原著
施灸皮膚の組織學的研究（灸の研究第二報）
福岡醫科大學雜誌第二十二卷（昭和四年）

の九州帝國大學醫學部衞生學教室に於て實驗的觀察せし概要を摘記すれば左の如し。

（イ）上皮組織　角層は最も早く且つ強く褐色若くは黑褐色に變じ、種子層は施灸一壯にては三十分後、既に細胞核は「ピクノーゼ」を示し、或は「カリオレキシス」又は「カリオリーゼ」となり、微細顆粒となり若くは無造構の層に化するも二十四時間を經れば施灸部周緣の細胞は增殖を始む、然れども連續施灸する時は高度の變性を呈し、上皮細胞は壞死して痂皮を形成するも、一般に上皮は再生的緊張狀態にありて、施灸の中止と共に速かに周圍より再生增殖旺盛なる上皮細胞によりて完全に復舊す。

（ロ）皮下結締組織　乳嘴層の結締組織細胞は先づ變性して「ピクノーゼ」又は「カリオレシキス」を示すこと等、表皮に同じく、又連續施

ピクノーゼは細胞核が濃縮すること
カリオレキシスは核破壞
カリオリーゼは核溶解
以上何れも細胞退行變性の像

灸にありては皮下層の深部に在る結締組織は浮腫を呈し硝子様に變化し或は結締組織細胞の増殖を見る、而して施灸を中止するときは速かに再生復舊す。

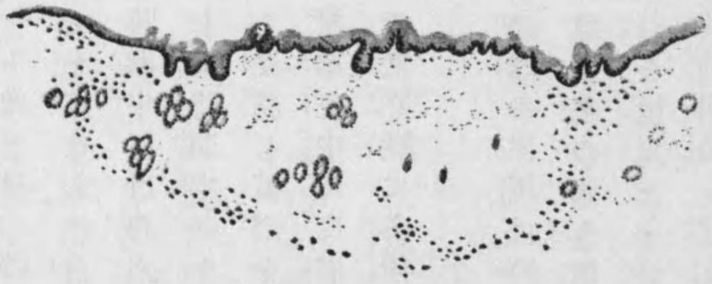
(ハ)彈力纖維　施灸部に於ては彈力纖維の走行亂れ、太くなり、施灸周縁部に於ては増加を見るのみならず、施灸を中止して瘢痕組織を形成するに至れば、速かに再生し且つ一時的に増殖を呈す。

(ニ)毛嚢　の細胞は其表層のものは「ピクノーゼ」・「カリオリーゼ」等を呈すること他の組織に同じく、又連續施灸のものにありては壊死層の間に無造構の毛嚢陰影を認むるも、其下部に在りては周圍は再生上皮細胞にて圍擁せらるゝを見る、而して施灸を中止すれば周縁より毛嚢を再生し毛髪を生ずるに至る。

(ホ)汗腺　樫田學士等は人體の陳舊灸痕には汗腺破壊すと報告せらるれども、家兎に於ける實驗にては汗腺の細胞は殆ど影響を受けず。

第十三圖

施灸皮膚顯微鏡標本



そしに膚皮兎家の半間時六後灸施
血白好嗜ンジオエ性假が織組熱加
劃區に狀月半りよに合集出游の球
す示を況狀いるらせ

(ヘ)血管　一般に高度の充血を呈し、往々毛細管出血を認め、血管外壁細胞は増殖す。

(ト)假性「エオジン」嗜好白血球　施灸後三十分には餘り組織浸潤を呈せず、一時間にても尚ほ浸潤を見ざるも血管内には中等度の群集を認め、一時間半には其集合を増し血管外に逸

走せんとする像を見、二時間半に至れば血管は假性「エオジン」嗜好白血球にて充滿せられ白血球過多の像を呈す、而して施灸後四時間乃至五時間半には白血球は集合・脱出・浸潤益旺盛となり、局所に向て集中し、六時間半に至れば邊緣部は密に、中央部は鬆粗に半月形を描きて浸潤し區劃を形成し、二十四時間後には漸次散在性となるも、連續施灸中の皮膚は該白血球の緻密なる浸潤を呈し、一般的には尚ほ散在性に各所に認むるも、中止後第一週日にして其影を沒す。

この白血球の出現は時間的に特別の現象と看做すべきものなり、即ち皮膚剃毛の如き單純刺戟に在ては爾後三十分にして既に高度の集合と脱出とを見、三時間にして最高潮に達するも施灸に在りては其時間頗る遲く、二時間半にて漸く旺盛となり、六時間半にして極期に達すること是なり、而してかゝる白血球出現の時間的關係を以て、施灸のために加熱變性せられたる蛋白體の異常分解により漸次毒性を帶び來りて徐ろに該白血球の反應を招來するものと解說せり。

青地著　灸の血球及び血清に及ぼす影響、附灸の本態に就て　日新醫學第十七年（昭和二年）

第十章　灸の身體に及ぼす變化

一　灸の赤血球及血色素に及ぼす影響

樫田・原田兩氏の實驗に依れば、赤血球は施灸後直ちに增加する場合と却て減少する場合ありて常に一定せざりしと云ひ、醫學博士青地正皓氏の實驗に依れば又赤血球並に血色素共に異常を來さずと云ふ。然るに原博士の最近の實驗に依れば施灸は六週間連

原著
灸の血色素並赤血球數に及ぼす影響（灸の研究第一報）
醫事新聞第一二一九號（昭和二年）

續するも其間には赤血球數及び血色素量に著しき影響なきも施灸を畢りたる後ち第一週日目より血色素量及び赤血球數、徐々に增加し平均第八週日目に至りて最高に達し血色素量大凡十六%内外（一〇乃至二四%）赤血球數五十萬個より百萬個位（或は尙ほ以上）の增加を示し、人體に於ては九週間（家兎にては十一週前後）持續す、此事實は古來灸は灼く時よりも後ちに至りて効果顯はるゝと言ひ傳ふる說に一致す。

血色素指數は增減不定なり、是に由て推斷するに、血色素の增量は主として赤血球數の增加に關するものとす、而して以上の事實は人體並に動物試驗の成績上、決して偶然の結果にあらずして確實に灸の影響に依るものなり。

二　灸の白血球數に及ぼす影響

樫田・原田兩氏の實驗に依れば豫め家兎に就き數回反覆して白血球を算し、以て其平均數を決定したる後ち灸を施し、其直後及び翌日乃至數週間に亘りて血球數を計算せり、而して檢査の時間は常に午後三時頃を撰び且つ食餌に因する「ロイコチトーゼ」（白血球增加）の影響を避くることを注意し、五回に亘りて試驗せし結果を總括するに、灸の直後、即ち二分間以内に採取せる血液には常に白血球の增多を見、多きは約二倍に達し、少くも三十四%の增加を示せり、而して翌日に至りて一度殆んど平常に復し其部に灸點膏藥を貼して化膿するに至らば再び白血球の增多するを見る、而して其增加の割合は畧ぼ化膿の度に一致す、而して白血球の增加は灸

を施したる直後に最も著しくして、後ち短時間内に平常に復すと云ふ。

又青地博士の實驗に依るに、施灸に因る白血球の增加は灸後十五分より漸く著明となり、一乃至二時間にして平常數の約二倍に達し、四乃至五時間にては稍減少するが如きも八乃至十二時間にして再び增加し二倍半以上に達し、而して爾後四五日間持續し、主として中性多核白血球の增加に基くと云ひ、又醫學博士時枝薫氏の實驗に依るも同じく白血球の增加を示し殊に假性「エオジン」嗜好白血球の增加著明なりと云へり。

又原博士の研究の結果に依れば一回の施灸に於ても亦每日連續する施灸に於ても白血球增多を起し、壯數に正比例して長く持續し、主として假性「エオジン」嗜好白血球・大單核白血球及び其移行型等は後ちに至り多少增加の傾向を呈せりと云ひ、而して施灸の結果、長期に亘る白血球增多症は單純の熱刺戟を以て說明することを得ざるも、其血液所見が皮膚火傷に於ける血球の所見と一致するを以て、恐らく火傷毒素と同じく加熱による變性蛋白體が一種の毒性を帶び來りて發起する作用に基くものなるべしと推斷せり。

時枝著　灸の實驗的研究第一報告血液の變化　日本藥物學雜誌第二卷（大正十五年）

原著　火傷及び火傷家兎血清の血液に及ぼす影響、附灸の白血球に及ぼす影響（灸の研究第三報）　福岡醫科大學雜誌第二十二卷（昭和四年）

三　灸の白血球機能に及ぼす影響

醫學士山下清吉氏は金澤醫科大學病理教室に於て家兎に就て灸の白血球機能に及ぼす實驗を試み興味ある成績を擧げたり、而して之には體重二瓩乃至二・五瓩の家兎を選み、〇・〇二五瓦、〇・〇五瓦、〇・一瓦、〇・三瓦、〇・五瓦の艾量を用ひたるが、其中最も著明の影響

山下著　灸の白血球機能並に技型に及ぼす影響　生理學研究第九卷（昭和七年）

を與へしは〇・一瓦の艾量を用ひたるものなり。

(イ)灸の白血球遊走速度に及ぼす影響

健常白血球に於ては遊走力は假性「エオジン」嗜好白血球最も速く、次で「エオジン」嗜好白血球・鹽基性白血球にして最も遲きは淋巴球・大單核白血球なるが、假性「エオジン」嗜好白血球の健常時速度は一分間一八・六〇「ミクロン」(一〇〇%)なりしもの、施灸に依て二一・〇六「ミクロン」(一一二%)に增加するを見たり。

(ロ)灸の白血球喰作用に及ぼす影響

白血球の貪喰力の强きものは假性「エオジン」嗜好白血球並に大單核白血球なるが、健常時の平均貪喰度二・二六(一〇〇%)なりしもの施灸に依て二・四六(一〇八%)に增强するを見たり、而して此貪喰作用は假性「エオジン」嗜好白血球の核左方偏移のもの最も强く、尙ほ全白血球が或種の刺戟狀態にあるも喰作用の强き原因ならんと云へり。

四　灸の白血球形態に及ぼす影響

施灸に依て白血球の增加することは既に之を述べたるが、山下學士は此以外に其形態に就て實驗したる所に依れば、白血球增加と共に假性「エオジン」白血球は施灸後二時間乃至五時間後に核の左方偏移を呈はすこと最も著し、之は骨髓より幼若白血球の新生を示すものにして、此時期に於て白血球の機能が最も亢進するを認めたり、而して此等變化の持續時間は約五十時間乃至七十五時間なりと云ふ。

五　灸の血清成分殊に免疫物質量に及ぼす影響

灸の血清に及ぼす關係、即ち細菌並に免疫學的の見地よりする實驗的効果に就ては夙とに着眼せられ、曾て醫學博士中條資俊及境田等兩氏は癩病患者の病竈部に點灸して癩菌に對する免疫性を增進して之を治癒せしめ、又醫學博士藤井秀二氏は鍼灸の刺戟によりて血液中に於ける諸種の免疫物質の增量することを發見せり。

中條及境田共著　東京醫事新誌（明治四十五年）

青地博士が灸治に關し專ら細菌學的見地より研究したる成績に就て其血清に關する部分を擧ぐれば(一)白血球の喰燼作用は著明に亢進す、即ち人體に於ける實驗も亦白血球增多症並に喰燼作用の亢進を認む(二)補體量を增加す、之は施灸後二日目に增加の傾向を呈し、第九日目に最高に達し、第三十日に至り殆ど復舊す(三)健常凝集素・同溶血素・同沈降素及び抗「トリプシン」量等には影響を見ず(四)「オプソニン」量は施灸後十五分にして增量し始め二乃至三時間にして最高に達し約一週間持續す、殊に人體實驗に於ても平常の一・五乃至二倍に達するを見る(五)小火傷の時及び加熱皮膚並に筋肉乳劑注射に因する血球並に血清に及ぼす影響は灸の場合と全然同一なるを以て、灸の本態は被加熱組織蛋白分解產物の吸收による一種の蛋白體療法にして、加ふるにヘッド氏帶治療的應用を以てしたるものと云ふを得べく、其治療的意義は唯暗示的にのみ働くものにあらずとせり。

時枝著　灸の實驗的研究第二報告及第三報告　日本微生物學會雜誌第二十卷（大正十五年）

次で時枝博士も亦同樣の實驗的研究の結果を數回に亘りて發表せり、之に由れば施灸に依て凝集素は殆ど影響なきか或は僅微

の增加を來すも、溶血素・沈降素は影響を受けず、而して溶血性補體は增量し、其增量は施灸後第二日より始まり第十一日目頃に最高に達し、爾後漸次減少して約一ケ月に至れば舊に復すべし、又免疫せる家兎に免疫と同時に若くは其產生せる抗體の減弱期に施灸するときは凝集素・溶血素・沈降素及び血球凝集素の產生は對照動物に比し著しき增加を見ることは興味あることにして、即ち抗體產生の度は施灸後第十一日乃至第十三日目に最高に達し、夫より漸次減じて約一ケ月の後には對照に比し其差を認むること能はざるに至ると云ふ。

六　灸の血清中「カリウム」及び「カルチウム」含有量に及ぼす影響

灸を以て一の蛋白體療法なりとせば、灸治が植物性神經系統と密接なる關係を有すべきに想到すべく、何となれば蛋白體の非經口的輸入は自律神經系統に震盪を招致し以て生活體の交感性變質を來すといひ、又適量の非特異刺戟は自律神經系統の末端に作用して植物性臟器の興奮性を亢進せしむると稱すればなり、果して然らば灸治が、植物性神經と緊密なる關係を保持する血清中の「カリウム」並に「カルチウム」含有量に如何なる變動を來すやを知らんと欲し、醫學博士瀧野憲照氏は京都帝國大學醫學部法醫學教室に於て家兎に就て實驗せしに、(イ)施灸後體溫の上昇すると共に血清中の「カリウム」含有量は增加し、之に反して「カルチウム」含有量は減少し、次に體溫の下降すると共に血清中の「カリウム」量は減少し、「カルチウム」量は之に反して增加す、而して體溫が漸次施灸前の狀

瀧野著施灸の血清に及ぼす影響に關する知見補遺

態に接近するに從ひ血清中の「カリウム」並に「カルチウム」含有量も亦漸次平常の狀態に接近す、(ロ)體溫並血清中「カリウム」及「カルチウム」含有量の動搖は施灸後可成り長期に亘ることを證明し、施灸による是等の動搖を以て植物性神經系の緊張狀態と緊密なる關係を有するものならんと云へり。

七　灸の血管に及ぼす影響

知覺神經の刺戟が反射的に血管運動神經に作用を及ぼすことは既に洽ねく知られたる事實なるを以て、樫田氏等は固有の灸刺戟の血管に及ぼす作用を確知せんが爲め、蛙の皮下に「クラーレ」を注射して總ての隨意運動を止めたる後、其蹼膜の準毛細管動脈を顯微鏡下に照らして其幅を測り、次に同側或は反對側の上腿部又は胸部に中切艾にて灸を施す時は鍼治の刺戟と同じく血管先づ初めに縮小し、後ち漸次にして擴張し、血行も亦た同時に著しく旺盛となる。而して血行の殆ど全く停止せる血管に於ても、灸刺戟に依り再び明かなる循環を開始せり、同樣の實驗を蛙の腸間膜の血管に試みたるに全く同一の變化を一層明かに認むることを得たり。

次に家兎の耳の附着部に近く中切艾を据ゑたるに、其血管極めて短時間縮小したる後ち强く擴張するを見たり、是に由て之を觀れば灸治は其激しき溫熱刺戟に因りて反射的に動脈管を先づ縮小せしめ、後ち反應的に擴張を來さしむるものにして、特に血管擴張の度は灸を施したる近傍に於て最も著しく、人體に於ても亦た血管の縮小及び反應的擴張を來し著しき充血を呈するは常に目

擊する所なり。

又後藤博士の實驗に依れば背部に施灸するときは四肢の血管は收縮し、血量を減じ、消火後十乃至六十秒にして復舊し其後は施灸前に比し却て血量を增加すと、而して脈數は灸が尙ほ燃えつゝある間は頻數にして消火後血管が擴張を來すも尙ほ施灸前に比すれば其數多しと云ふ。

八　灸の血壓に對する作用

灸治が血管に著しき作用を及ぼすことは前項の如くなるが、從つて血壓に對しても亦た影響を來すべきは明かなり、樫田氏等は此關係を確知せんが爲めに實驗を行ひたるが、先づ五頭の家兎に就きての成績に依れば、灸を施すの部位には關せずして施灸後直ちに必らず多少の血壓昇騰を來すものなり、其時間は動物の溫痛を感ずると殆んど同時に急に上昇し、刺戟の去りし後ちも短時間にして漸次に下降を始め舊に復するを見る、而して其上昇の度は各種の動物により、其他不明の原因によりて差異あるも、艾炷餘りに小なる時は上昇少く、且つ燃燒速かなる時は其上昇も亦た大なるが如し、猶ほ此實驗に於て最も强く上昇せるは一〇〇粍、最低一〇粍水銀壓なりとす、而して心動は血壓の上昇せる間は多く緩徐となり且つ呼吸は深くなれり。

次に人體に就き灸の血壓に及ぼす影響を知らんが爲め、十二名の患者にリワロッツ氏血壓計を應用して檢測したるに、孰れも多少の血壓の上昇を見、其最も著しきは實に三二粍に達し、最小は五粍なりし。

血壓上昇の理由は後ちの研究に依り、施灸のために起されたる血管神經の末梢性興奮上より起る血管壁自己の緊張性收縮と並に血液中に血管收縮促進性物質即ち「アドレナリン」が增量(灸刺戟に依て副腎內分泌機能の增强に基く)せしに因るものと認めらるるに至れり。

九　灸の腸蠕動に及ぼす影響

樫田氏等の實驗に依れば、家兎の腹部の毛を剃去し其部の蠕動を明かに見得る時、之によりて目擊しつゝ檢したるに腹部中央に一個の灸を据ゆる時は、引續き一回蠕動あること多く、其蠕動は小となり同時に腹部の明かに高まり來るを見、同時に呼吸數の增加を見る、而して灸せる後は蠕動の間隔一二回は概して長き時間を要し、其後は平均によれば灸前は十分間に十八回半の蠕動が灸後は十五回半になるを見たり、又食餌を攝りて明かに蠕動の高まりし後ち灸を据ゆる時は前同樣、灸に引續き一回蠕動あること多く、灸後一二回の蠕動の間隔は長時間を要し、其後も明かに蠕動數少し、故に灸は家兎に於て食後高まり居る通常の蠕動にても多少減ずるを見るのみならず、既に通常よりも高まり居る蠕動には明かに減少するを見るべし。

其後駒井學士の實驗に依れば小腸上部が最も活潑なる運動をなすと云ふ、而して腸の蠕動に對する影響は恐らく血中に「アドレナリン」が增量し其作用によりて腸管壁の交感神經系に影響を與ふるに因るものならんと。

一〇　灸の膽汁分泌に對する影響

駒井博士の實驗に依れば膽汁分泌は施灸前採收せし膽汁量は三・一八立方糎なりしもの三十分後には四・四七立方糎となり、尚ほ三十分後には二・八五立方糎に減ずるを見る、即ち膽汁は施灸直後に於て漸次增量し、施灸後三十分にして最高量に達し、以下時間の經過するに從ひて減少するを見たり、此作用は交感神經の刺戟興奮のために分泌機能の亢進を來すものと認めらる。

一一　灸の肝臟機能に及ぼす影響

家兎に色素肝臟灌流試驗を試みたる實驗に依れば、施灸後一定時間にして色素排出量は最高となり、以後漸次時間的經過と共に其排出量を減ずることを證明せりと云ふ。

越智著
灸治が腎臟の機能特に利尿に及ぼす影響に就て
京都醫學會雜誌第十五卷（大正七年）

原著
灸治の醫學的研究

一二　灸の腎臟機能に及ぼす影響

灸は腎臟の機能には其効なきことを唱へられたりしが、醫學博士越智眞逸氏の家兎に就きての實驗的研究に依れば胃兪・三焦兪・腎兪・氣海兪・大腸兪・關元兪・小腸兪・膀胱兪・胃倉・育門・志室等古來腎と關係ありと稱せらるゝ經穴に施灸するに利尿作用に著しき變化なく、時に蛋白尿を惹起して腎臟機能に對する障害あるを認めたりといふ、然れども原博士は之に對して多少の疑ひを抱き、今後尚ほ研究を要するものなりと云へり。

一三　灸の疲勞曲線に及ぼす影響

樫田氏等の實驗に依れば蛙の腓腸筋を疲勞せしめ殆ど攣縮を見ざるに至れる際、即ち疲勞曲線を描きつゝある際に直接坐骨神經に施灸するも何等の影響なきに反して、皮膚に施灸するときは直ちに筋攣縮の高さを増し、即ち疲勞を恢復するを見る、是は筋肉に血行ある時は勿論、血行なき時並に神經を切離せし時と雖も、其結果は殆ど同一なるを以て見るときは、灸の筋肉に及ぼす作用は血液循環を催進し、筋肉中の物質代謝分解產物を除去し、榮養を供給する等に依る繼發的の現象にあらずして、直接に筋肉に對して刺戟として作用するに由るものと云はざるべからず。

人體に於ける經驗に依るも、施灸は多少疲勞恢復に効あるものの如しと雖も、人體は精神作用によりて左右せらるゝこと大なるを以て確實なる成績を知るには尙ほ多くの實驗を重ねざるべか

らずと云へり。

一四　灸の骨發育に及ぼす影響

黑住著
同種及異種の臟器乳劑並牛乳の非徑口的移入が骨系統の發育並食餌性骨病の發生に及ぼす影響
附灸法の之に關する實驗的研究
大阪醫學會雜誌第三十一卷（昭和六年）

醫學博士黑住久氏は家兎に臟器乳劑等を注射し傍ら施灸と比較して骨系統に對する影響を實驗せり、即ち家兎の骨髓・脾臟・肝臟・腎臟・雞の骨髓・肝臟の各乳劑並に牛乳を約三週間毎日皮下に注射し、又同期間内に約十回（一回に〇・〇一瓦の艾を三火）施灸するときは共に管狀骨に「アルカローゼス」性變化を呈し且蔗糖攝收に因て構成せらるべき「アチドージス」性骨病を抑制し、殊に施灸は其成績斷然優越す、是に由て見るときは蛋白體療法としては異種蛋白よりも同種蛋白殊に自家蛋白が最もよく自體に適應するよりして頗る灸療法を賞揚せり。

第十一章　灸治作用の理論即ち効驗

灸は皮膚表面に火熱を用ひて燒灼する高溫刺戟が身體に作用するものなることは言を俟たずと雖も、其高溫刺戟が病竈に如何なる作用をなして治癒機轉を促進するものなるや未だ根本的に説明するの域に達せざるも、輓近に至るまでの實驗的研究の結果を綜合するときは略ぼ左の如く考ふることを得べし。

皮膚の熱刺戟は艾葉以外の單純なる刺戟、例之ば溫湯又は他の火傷にても治療作用を同くするかに就ては異議なきにあらず、曾て原南洋は「唯火氣之を溫むるといふ時は溫石・熨法と何ぞ分たん、灸の効唯火効のみならず、艾の効も存ぜり」と云ひ、後藤艮山は「灸の効孤行微なりと雖も内攻の力あり、火氣之を溫むるのみにあらず、暗に艾氣の妙を通ず」と云ふと雖も是等の説は唯、推理に止まり毫も學術的根據あるにあらず、後藤博士の實驗に依れば「ガーゼ」を八枚折として之を微溫湯に浸し、此「ガーゼ」を隔てゝ施灸するときは血液分佈の狀及び脈搏數の關係は恰も通常の灸と同樣なるを認め、以て直接皮膚を灼くよりも熱氣療法或はブリーゲル氏の蒸氣灌漑「マッサージ」の如きを用ひるも同樣の効果を得べく、然れども之等は複雜なるを以て溫灸の單簡なるに及ばずといひ、暗に艾灸の効を認めず、又艾葉の分析に依て見るも其成分未だ悉く明かならざるところあるを以て、之が化學的効驗に就ては全然不明なりと謂はざるべからず。

皮膚高溫作用は血液循環に影響を及ぼすべし、先づ局部の血管擴張による實性充血のために局部動脈血の灌流を增すと共に、血

球を集積して細胞新陳代謝機能を催進し、病的滲出物の吸收を盛にし、一方には血管運動神經の收縮に依て一時血壓を增加せしめ、血液分佈に變化を來し以て全身血行を旺盛ならしむる作用をなし、又赤血球の增加と共に血色素量を增すを以て燃燒を盛んにし以て新陳代謝を活潑ならしめ、身體を健康ならしむると同時に疾病豫防の實を擧げ且つ之が病竈に作用して其病的機轉を挫折せしめ、治癒を促進するに至るべし。

白血球の增加は亦極めて著明なるものにして一時、白血球增加症の狀態に導き、喰作用を亢進して組織中に存在する細菌を喰燼するのみならず、病的退行變化に陷れる組織成分を食燼して治癒機轉を速かにし、抗體並に補體量を增加して血液の殺菌性を增强せしめ、以て疾病の豫防治癒に効果を奏するものと見るべし。

皮膚高溫作用は被加熱性蛋白分解產物を生じ、其吸收により細胞を刺戟して此の如き作用を現はすものにして、即ち一種の蛋白體療法なりと稱するに至れり、而して此被加熱性蛋白體は殆ど火傷毒に類するものにして、原博士の實驗に依る火傷との比較研究の結果、灸療には先づ灸の分量を定むる必要ありとし施灸の度を過すときは動物は憔悴を來す、之は蛋白體療法の分量を誤りたるときに、時々副作用として現はるゝ蛋白體憔悴に相似たるが故に灸は一種の蛋白體療法たることを肯定すると同時に、加熱組織の變性蛋白體の分解によりて生成せらるゝ火傷毒素の作用と看做せり、而して此變性蛋白體は前述せしアルント・シュルツェ氏の生物學的原則に依り身體諸組織の細胞に弱刺戟を與へ以て生活機能を衝動するものなりとす。

然れども灸に依て生ずる變性蛋白體と火傷毒素との作用を同一なりとする說に反する實驗あり、即ち火傷の强度の場合には白血球の遊走速度を減じ、又喰作用機能の減退を見るものにして、此等減弱の最も著しき時は核の左方偏移の最も著明なる時と一致し所謂退行性左方移動を示すものなるも、前記山下學士の實驗によるときは施灸に於ける白血球遊走速度及び喰作用機能の旺盛なる時は核左方移動の最も著明なる時にして所謂進行性左方移動を示すものなるを以て、灸灼と火傷とは互に相似て全く異なれるものならんと云へり、要するに尙ほ將來の研究を待て決定せらるべきものなりとす。

皮膚高溫作用は其他神經系統の作用に及ぼすこと甚だ大なるものなり、即ち皮膚交感神經の刺戟に依て網狀織內被細胞系が刺戟せられ相共に血管並に血液に變化を生ずること鍼術の學理と相同じく、又皮膚神經の刺戟が內臟系に及ぼす作用は、皮膚に分佈する脊髓神經知覺纖維の刺戟を脊髓中樞に傳達し、一部分は反射的に脊髓中樞と密接なる關係を有する臟器の運動機能を興奮せしめ、又一部分は脊髓より腦髓中樞に刺戟を傳へて更に遠心性運動神經を經て末梢神經の分佈せる臟器に作用し、又此等の作用と同時に皮膚交感神經の刺戟に依て反射的に內臟神經が興奮せられ、以て臟器の反射運動を起すに至るべく、即ち副交感神經と交感神經との共同作用に依て、內臟の機能(運動・分泌等)を左右するものにして、內臟知覺に對する作用も亦此の如き經路に由て解明することを得べし。

灸の作用は上述の如く一は蛋白體刺戟による細胞の反應作用

に依て新陳代謝を旺盛ならしむると、一は直接神經系統の傳達並に反射作用、殊に自律神經の作用に依るものと認むべきも、各疾病に對する治効に至りては施灸部位として古來久しき經驗を重ねたる特有の點、所謂經穴のあるありて皮膚神經の反射作用が主要なる能力を發揮すべきものたることを考察すべく、殊にヘッド氏知覺過敏帶の實驗的學理に基きて疾病と皮膚部分との連絡を説明することは又經穴との關係を説明する上に於て最も適切なるべきは鍼術に於けると全く同一理なりとす。

第十二章　灸術の應用

一　灸術の病體應用（又作用）

灸治は前章其作用に就て述べしが如く種々の疾病に對し皮膚の溫熱的刺戟に依て治療の目的を達するものにして、一般神經痛・痲痺・神經性消化不良或は關節炎の如き、或は一局處の筋肉炎の如き、又「ロイマチス」の如き、其他總て充血に因する疾病等より起れる炎症性滲出物等の吸收を促がし、又は或る種の新生物の癒生を促進し、就中官能的諸神經機能の變常に因る疾患に對して最も顯著の効あるものなり、既に「内經」にも湯藥攻二其内一、鍼灸攻二其外一、即病無所逃矣の語あり、又「千金方」には其有二須鍼者一、即鍼刺以補二瀉之一、不レ宜レ鍼者、直灸之云々、若鍼而不レ灸、灸而不レ鍼者、非二良醫一也、鍼灸而不レ藥、藥不二鍼灸一尤非二良醫一也と記し、灸法と鍼術とは相併せて治療の要術たることを説き、我大寶令にも鍼術灸治の法と并び稱して之を鍼科の中に入れたり、其孔穴主治等に至るも鍼術に於けると稍や相似たり、唯

場合に應じて少しく禁忌を異にするの差あるのみ云々とあり、斯學者たるもの又以て鑑とするに足るべし。

蓋し時代の變遷或は法規上且つ外科醫學進歩の結果猶ほ一小部に於て外科的疾患に應用せるものあるも、輓近は內科的に多く應用せられ、外科的の應用極めて少なきも、往昔は盛んに使用せられたること左の史實に見るも明かなり。

寛平十年(紀元一五五七年)宇多天皇、患癰疽在臍下左傍而色赤而不痛不熱、後癰破損、岩倉梅陰庵及大德寺玄首坐兩人參內、左緣上而隔障子破紙作竅而視之灸腫上云々。

丹波重基は雅忠の孫なる重康の子、權侍醫典藥頭、施藥院使丹波權守主稅頭女官別當、美作守等に歷任す

崇德天皇、大治五年(紀元一七九〇年)關白忠通癤(癤瘡とは瘰癧の如きを云ふ)を病む、大さ柑子の如し、痛み骨節に徹し轉倒する能はず、丹波重基之を灸する三十七壯、痛み頓に減す、次日膿潰して癒えたり。

後堀河天皇、嘉祿年中(紀元一八八六年前後)當時は灸治盛に行はれしにや「淸益問答」に北條時宗が其師光國師のため投化人朗元房・漢章の二醫官をして灼灸せしめしと、又「東鑑」に時宗北條入道患癰腫難堪招本道外科盡補瀉割灸之奇術云々。

慶長三年(紀元二二五八年)後陽成天皇御惱みあるに、道ぬしのやきひ(灸)を奉らんときこえしがと、一條殿、鷹司殿其例なしといはれて止みたり、後ちに癰瘍を病みたまふ時、中院入道也足軒の其例ある舊記を見出されたるに依つて、せさせたまひて今より後も此の術用ゆべしと勅らせたまひしことを記せり。

便毒とは橫痃のことなり

「源平盛衰記」に筒井淨妙云々、甲冑に立つ處の矢六十三、大事の手五ケ處なり、閑處に立寄つて彼是灸治し云々。

「病因考」(後藤艮山著)便毒に灸するは能く色づきてからすべし、又

貝原益軒著

腫を取る時は灸すると、よつた毒氣散ずるなり云々とあり。

「養生訓」に癰疽及び諸瘡腫物の初發に早く灸すれば腫れあがらずして消散す、うむといへども毒かろくして早く癒えやすし、項より上に發したるには直ちに灸すべからず、三里・氣海に灸すべし、凡腫物出でゝ後七日を過ぎなば灸すべからず、此灸法、三因方以下諸書に出でたり、醫に問ひて灸すべしとあり。

「養生囊」(小川顯道著)に狂犬に咬まれし人は急に艾炷を大にして數千壯灸すべし、極て死の難をのがるべし、又野呂實夫が云ふ百日の内毎日灸すべし、一日も欠くこと勿れ、是第一の良法なりと、又香川先生は灸爲第一上策、其次用白虎湯・大承氣湯之類と說けり、すべて咬まれたる時、傷甚だ痛まず、やがて癒るにより輕きことに思ひ疎かにして、終に命を失ふ人多し悲むに絕たりとあり。

以上通覽する如く灸療が古來より内外科方面は素より豫防醫學の方面にまで應用せられたることを知るに足るべし。

二　灸術の健體應用（又作用）

灸治の健體に於ける作用は又鍼治の夫れの如く灸炷の發する溫熱が一の理學的刺戟となり、之を適度に施すときは知覺・運動若くは交感の諸神經を刺戟して其亢奮性を高めて其作用を强實ならしめ、血管神經に對しては之を擴張充血せしめて其部の血液灌漑を旺盛し以て新陳代謝を良くし、又諸臟器に對しても之が機轉をして亢盛するの作用を呈する等、前章作用の條下に述べたるが如し、固より灸治と雖も其度を失せば却て興奮性を減弱せしめて諸器官の機能を沈降せしめ、前記と相反するの結果を示すも、其度

宜しきを得ば健康の增强に對して著しき効を奏するものなり。

無病健全の者にして養生法若くは疾病豫防の方法として時々施灸することは往昔より盛に行はれし所にして、彼の道歌にも「朝起きや身を働いて小食に忠孝あつく灸すえる人」とあるが如き、或は「ケンビキの灸無き人とは旅を共にすな」との諺言や、「二日灸」・「土用灸」と稱して大人小兒ともに陰曆二月若くは八月の二日に施灸するが如きに知らるゝが如く、一般に健康者と雖も膏肓・三里・絶骨等には養生法として又四華・患門・腰眼等は呼吸器・消化器等の豫防として効あるものと信ぜられ居たるものゝ如し、而して斯の如きは何れも多年の經驗より出でしものなれば、之を現今の學理に照しても多少の據る所あり、彼の「ハヤウチカタ」(心臟痲痺)の豫防として行はるゝ「ケンビキ」(膏肓)の灸の如き恰も膏肓は僧帽筋の中央に相當し、該筋には主として副神經の分佈するを以て之に施灸せば反射的に心臟鼓舞神經に作用を及ぼし、其運動を亢進して痲痺を防止する作用あるものと解せらるゝが如く、又現今に於ても猶ほ健康者にして年に數回時期を定めて施灸する者の尠からざるに見るも、强ち無稽の言、舊慣の行爲として排すべからざるなり。

三　豫防灸並養生灸

豫防灸として古來指示せる經穴多しと雖、最も普通に行はれしものを茲に例示し、以て研究の基礎たらしめんとす、尙ほ各其據る所に依て豫防し得べき疾病に對し之が經穴と方法とを定め試むべきなり。

脚氣　(三里・足曲池・風門)　中風　(肩外・曲池・三里・足)

「養生一言草」に、灸治こそ養生中の一つなれ四十にしては三里たやすな
又
小兒にはちりけ天樞筋かへを毎月すへて無病とぞきく

逆上（大抒・三里足）　胃腸疾患（膈俞・三陰交・命門）

神經衰弱（三里足・神門・至陽）　濕毒（三陰交・風門・曲池）

養生灸としては二日灸等あるも、古來より三里を要穴とし之に施灸を絶たざるときは健康を保つと稱し、「鍼灸聚英」にも有人年少氣弱、常於三里氣海灸之、節次約五七十壯、至年老熱厥頭痛、雖大寒猶喜風寒云々等其元氣旺盛なるを知るべく、無病長壽を保ちし人の實例甚だ多し、而して古來より之に應用せられたる三里の施灸方法は施術者により多少の差異あるも、多くは左の方法に則れり。

	第一日	第二日	第三日	第四日	第五日	第六日	第七日	第八日
男 左	九	一〇	一一	一二	一〇	九	九	八
男 右	八	九	一一	一〇	九	九	八	八
女 右	九	一〇	一一	一二	一〇	九	九	八
女 左	八	九	一一	一〇	九	九	八	八

其他三里と共に曲池に灸し、又大椎・風門・肺俞・膈俞・肝俞・膽俞と三里とを合せ施灸することあり。

而して男は左を、女は右を先きに始むべしと云ふが如きは無稽の説に似たるも實地に當りては之に從ふをよしとす。

第十三章　灸治の適應症及び不適應症

灸治の適應症とは常に施灸して其効顯著しく且つ確實なる疾病並に症候を云ふ、而して往昔は專ら外科的に應用せられしが今多く内科的となり、鍼術とは其要大同小異なり、即ち諸種の官能的神經機能の變常に由り起る腦及び脊髓神經・交感神經の興奮に因る過敏・疼痛・痙攣・搐搦或は其機能減弱に因りて發する痲痺・知覺異常及び内臓機能の旺盛又は減衰に因りて發するもの等にありと

雖も、亦一局所の充血或は炎症性滲出物及び腫脹・水腫「ロイマチス」・脚氣或は慢性消化器病・呼吸器病其他小兒の病氣等に對し最も特異の効驗あり、殊に鍼術に同じく患體が尙ほ治癒能力を保有する時を選み、且つ疾病が現狀を維持しある狀態にて經過する時に行ふを最も適應とす、今其適應症の重なるものを擧ぐれば左の如し。

呼吸器病に於ては初期肺尖「カタール」・肋膜炎・喉頭「カタール」・氣管枝「カタール」・衂血。

消化器病に於ては慢性胃「カタール」・胃擴張・神經性消化不良・慢性胃痙攣・急性、慢性腸「カタール」・腸疝痛・痔疾。

泌尿器病に於ては腎臟炎・膀胱「カタール」・膀胱痙攣・淋疾・尿道「カタール」・睾丸及び副睾丸炎。

運動器病に於ては急性及び慢性關節「ロイマチス」・急性及び慢性筋肉「ロイマチス」・關節炎。

神經系病に於ては肋間神經痛・坐骨神經痛・腰神經痛其他諸神經痛及び麻痺・痙攣・脚氣・「ヒステリー」・神經衰弱。

小兒病に於ては小兒急癇・夜驚症・夜尿症・夜盲・結膜炎・眼瞼緣炎・胃腸病、腺病病質。

婦人病に於ては官能的子宮痙攣・月經因難・子宮內膜炎・白帶下・其他鍼治と同じく消化機能及び榮養機能を喚起し殊に子宮疾患より來れる胃の諸症に適し、上記の作用を發起するに由りて考ふるも又適應症なるべし、結核性疾患にも亦有効なり、從つて諸病の恢復期に應用せば其治癒を促進し自然恢復期を短縮せしむべし。

灸治の不適應症とは是れ又鍼治と同じく灸治を施すも只に無効に屬するのみならず時に障害を釀すやも計り難き疾患を云ふ。

即ち心臟瓣膜障害・頑固なる慢性の腦脊髓性疾患・慢性皮膚病・發疹病・熱性諸病・腸寄生蟲病其他概して機質に大なる變化ある疾病等は是に屬すべきものとす。

第十四章　灸治の禁忌症及び禁忌點

灸治の禁忌症とは施灸効を奏せざるのみならず鍼術と同しく有害無効なるべき疾病を云ふ。例之ば急性盲腸炎の如き或は急性腹膜炎の局所施灸の如き、或は諸種の癌腫を始め惡性の腫瘍の如き或は創傷の如き及び法定傳染病並に破傷風・丹毒其他總ての發疹性の慢性傳染病・傳染性の皮膚病等は最も深く警戒し禁ずべきものなり。之を歷史に鑑みるも既に織田氏・豐臣氏時代の外科醫學中にも鍼灸の術は之を施すに注意を要す、腫物(瘻瘤)コブには漫に鍼灸すべからず、風毒腫の初期に鍼灸し頭及び頸の瘡瘍に鍼灸することを禁ずべし云々とあり。

又禁灸の部位は鍼術と異なり何れの部位に施すも敢て大害なしと雖も、頭部の多壯・心臟部及び外部に現はるゝ處の顏面部・手指の如き或は妊婦・產婦又は妊娠の疑ある者等に對しては猥りに下腹部に施灸することを避くべし。其他惡性の新生物及び皮膚に變化ある部は努めて點灸を禁ずべし。然れども學理詳にして經驗に富みたる者は臨機の療法を施すも敢て危害を招くが如きことなきのみならず、又偉大の効果を奏すべきことあるべし。

蓋し經穴學に示せる禁灸穴の如きは宜しく解剖的關係を對照し愼重注意して取捨すべきなり。

附編

斯道業務上の注意

斯業に從事せんとするものは左の各項に注意する事極めて緊要なりとす。

(一)施術上醫師の業體を模倣し、或は瀉血し或は切開し排膿を圖り繃帶を施すが如く、或は藥劑を塗擦し又は藥劑を投與し若くは藥方を指示し、或は電氣・烙鐵・吸角を使用し或は其の他の治療法を併用する等、決して法規に定められたる權限外の所爲あるべからず。

(二)刺鍼の効果疑はしきか、或は効あるも尙ほ他の療法を加へざれば全癒せず、或は病勢增進し患者の不幸を招く虞れありと認むるものには直ちに其旨患者又は家族に諭して速に適當の療法を勸告し、猥りに刺鍼に委ね或は强て施鍼を勸誘すべからず。

(三)鍼術・灸術業者は免許されし鑑札は他人に貸與し、或は無免許者をして猥りに施術を行はしむるが如き行爲あるべからず。

(四)鍼術・灸術業者は就業中常に鑑札を携帶し且つ移轉又は出張所等を設けし場合は其都度法規に從ひ屆出でざるべからざるなり。

(五)術者及び鍼器は勿論、施鍼部位は消毒方法に從ひ規定の消毒藥を以て各々消毒を確實に施行し之を等閑に附すべからず。

(六)縱令ひ一鍼・一灸と雖も常に解剖學・生理學は勿論、病理學・診斷學等を基礎とし、徒らに暗中摸索をなすが如き所爲あるべからず。

(七)猥りに自己の技術を誇り又は經歷を誇張したる廣告等をなして斯道の神聖を毀損し又は世人を惑はす等、斯業の信用を失墜するが如き所爲あるべからず。

日本鍼灸學教科書中編(終)

大正二年二月八日印刷
大正二年二月十一日發行
大正五年一月一日第二版發行
大正七年六月一日第三版發行
大正九年七月一日第四版發行
大正十年四月五日第五版發行
大正十二年一月五日第六版發行
大正十三年五月五日第七版發行
大正十五年三月五日第八版發行
昭和三年三月一日第九版發行
昭和四年十月五日第十版發行
昭和六年五月五日第十一版發行
昭和八年五月五日第十二版發行
昭和十一年八月一日第十三版印刷
昭和十一年八月五日第十三版發行

正價金四圓五十錢

著作兼發行者　大阪市西區江戸堀下通三丁目六番地　山本新梧

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下精一郎

印刷所　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下書籍印刷所

發行所　大阪市西區江戸堀下通三丁目六番地
大阪府指定無檢定開業　關西鍼灸學院出版部
振替貯金口座大阪一八四八七番
電話土佐堀七七二六番

大賣捌所

大阪市東區北久太郎町四丁目	合資會社柳原書店
大阪市東區博勞町四丁目	丸善株式會社大阪支店
東京市日本橋區通三丁目	丸善株式會社書店
東京市本郷區本富士町二番地	文光堂書店淺井光之助
東京市本郷區春木町二丁目	半田屋醫籍商店
東京市本郷區春木町三丁目井二番地	南江堂小立鉦四郎
京都市上京區寺町通御池南入	南江堂京都支店
東京市本郷區龍岡町三十二番地	南山堂書店
京都市三條通麩屋町	丸善株式會社京都支店
神戸市楠町六丁目交叉點東入濱側	川島通弘
福岡市博多上西町（電車通）	丸善株式會社福岡支店
大阪市南區日本橋二丁目交叉點東辻	和田新鍼具店

本書を講義錄に代用せらるべし

書目は貳錢郵券封入申込むべし

日本鍼灸學教科書

前編

第十四版既刊

定價 金五圓
郵税内地 金二十一錢
滿朝臺灣 金五十錢

本書は著者が四十年來の實驗と三十餘年に亘れる後進養成等の經驗に基づき斬新なる智識普及に努めんと欲し、心血を絞り多年其蘊蓄せる處を詳述し、記事簡に失せず繁に流れず其必要なる部分を取捨撰擇し何人にも理解し易く懇切周到に說明せり、特に解剖、生理學に通曉せしめんため原書に基づきたる精圖約壹百挿入したるが如き或は刺鍼法並に鍼管挿入法等の圖書まで挿入して讀者の理解に便ならしめたるが如きは近時續出せる此の種の書籍とは大に其趣を異にし眞に斯界空前の大著述なり從來本院教科書の筆記分與を請ふもの或は講義錄として出版を望むもの頻々たり、旁々時代の要求を充さんが爲め茲に上梓せる所以なり、故に當業者机上の好侶伴とし將た又後進者養成の唯一教科書として本書の右に出づるものなかるべし

日本鍼灸學教科書

後編

第十二版既刊

定價 金六圓
郵税内地 金三十三錢
滿朝臺灣 金六十二錢

本書の内容は經穴學と病理學とに分ち、經穴學編に於ては大なる精圖を挿入し、之を解剖學に對照し最も斬新奇拔にして然かも便益絶大なる取穴法、即ち外表に現はるゝ突起隆起を基とし、位置を模索する方法を詳細に說明し、病理學編に於ては其總論は簡明を尚び各論には鍼灸術に最も適切緊要なる病症と將た亦禁忌すべき疾病とを鑑別し、一病毎に原因、症候、療法、刺鍼點灸の要穴を記述したれば讀者をして斯道の堂奥に到達せしむるを得ん

元内務技師醫學博士　上村行彰先生校閲
日本鍼灸會會長　山本新梧編纂

大增補第十五版
挿圖着色鮮麗　紙數六百數十頁

各府縣 鍼灸術試驗問題解答集

正價　金四圓五十錢
郵税内地　金二十一錢
清朝臺灣　金五十錢

本書は既往十數年間に於ける各府縣の鍼灸術試驗問題一千有餘を蒐集し之を解剖、生理、鍼灸消毒學及び病理學の各部に分ちて一々簡明適切なる解答を附し簡易を旨とし平假名を傍し婦女子にも理解し易からしめ加ふるに全身血管同内臟同神經の着色精圖を挿入し、殊に第十五版に於て問題數百を增補改版全く面目を一新したれば受驗者一度本書を繙く時に忽ち試驗增上合格者たるの月桂冠を得るは勿論鍼灸家其他柔道整復術家、看護婦たりと雖も亦机上の好伴たり……●附錄に各府縣の試驗問題府縣別に三千餘問掲載せり

天下一品

●發行所　大阪西區江戸堀下通三丁目六番地　關西鍼灸學院出版部　振替貯金大阪一八四八七番

●大賣捌所　大阪東區博勞町四丁目丸善書店・大阪東區北久太郎町四丁目柳原書店・東京市本郷區本富士町二淺井文光堂・東京市本郷區春木町三ノ廿南江堂書店

鍼灸術教授

本院在學中に學説と實地共に修得せしめ模範的鍼灸師の養成を期す

大阪市西區江戸堀下通三丁目　認可　關西鍼灸學院

院長　日本鍼灸會々長　山本新梧

特典　本院卒業生ハ全國無檢定ニテ免許セラル

規則書入用ノ方ハ四錢郵券封入申込ノ事

●入學期日ハ毎年四月申込三月二十日迄、毎回早ヤク期日前ニ滿員ス

60
320

終